
明清・群星興亡賦～親王ドルゴンの理想

亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明清・群星興亡賦〜親王ドルゴンの理想

【Nコード】

N3673M

【作者名】

亀

【あらすじ】

十七世紀初頭、中国は明王朝の時代である。

中原から遠く離れた満州の地に興った後金国（後の清）は、年々大國明の圧迫に苦しんでいた。だが本作の主人公ドルゴンは、持ち前の政治手腕で草原の民をまとめ、明をも打倒しようと大望をいだくやがて万里の長城をも越えることとなるドルゴン、果たしてその先に待ち構えているものとは……。

明清の興亡を動乱の世に翻弄され続けた一人の舞姫の運命とともに描いていきたいとおもいます。

第一幕 主な登場人物

【後金陣営】

ドルゴン（多爾袞）… 本編の主人公、ヌルハチの第十四子、睿親王。知略に優れ、優れた政治手腕をもってヌルハチ、ホンタイジの果たせなかった山海関越えの悲願を達せんと欲す。

ヌルハチ（奴兒哈赤）… ドルゴンの父、全女真族を統一した希代まれに見る英傑、国号を金（後金）と定め大汗に即位、サルフの会戦で明軍をも一蹴するも、寧遠で袁崇煥に敗れ、明征討はならなかった。

ホンタイジ（皇太極）… ニュルハチの第八子、後に国号を清と改め初代皇帝に、三百年続く大帝国の礎を築く（母・葉赫納喇氏）

ダイシャン（代善）… ニュルハチの第二子、サルフの合戦では父ヌルハチとともに、明の大軍を迎えうつも、晩年のヌルハチとは対立したといわれる。満洲八旗のうち正紅旗の旗主（母・？佳氏）

マングルタイ… ニュルハチの第五子、満洲八旗のうち正藍旗の旗主（母・富察氏）

アジケ（阿濟格）… ニュルハチの第十二子、ドルゴンと母を同じくする。満洲八旗のうち正黄旗の旗主

ドド（多鐸）… ニュルハチの第十五子、ドルゴンの同母弟、やや意思薄弱

アミン（阿敏）……ヌルハチの弟シウルガチの第二子、サルフの合戦で活躍するも、後ホンタイジと対立することとなる。満洲八旗のうち？藍旗の旗主

ホーゲ（豪格）……ホンタイジの第一子、満洲八旗のうち？白旗の旗主、後終生にわたってドルゴンの最大の競争相手となる

烏拉納喇氏……名はアバイ。ドルゴン、アジケ、ドドの母、十二歳でヌルハチの妾となる。後正妻となるもヌルハチの死後、悲劇的な生涯の結末を迎えることとなる

【明王朝側】

万曆帝（神宗）……明朝十四代皇帝、名宰相張居正の補佐をえて、名君の期待が高かったが、後、蓄財と享樂に溺れる暗君に転落、二十五年間にも及び、政務に一切関与しなかったという中国史上前代未聞の皇帝。その無能ぶりは後の世の人をして「明の滅びるはまさに神宗に滅ぶ」といわしめた

泰昌帝……明朝十五代皇帝、皇帝即位後数ヶ月にして謎の変死をとげる

天啓帝……明朝十六代皇帝、明朝の数多い暗君のうちの一人、魏忠賢の専横を許す、趣味は大工仕事

魏忠賢……元無頼の博徒、去勢して宦官となり明の宮廷に仕える、天啓帝時代に権勢の頂点を極め、反対派を次から次へと弾圧、末期明王朝の癌となる。中国史にたびたび登場する悪宦官の典型例

袁崇煥……末期明王朝の運命の担う天才的な軍略家、元は進士に及

第した文人であつたが国を憂え、進んで軍の第一線に身を置くこととなる。ヌルハチと寧遠城で宿命の対決をする。その智謀は人をして今孔明と呼ばしめるが、後悲劇的な運命の変転にみまわれることとなる

草原の蜃気楼

中華の文明が大輪の花を咲かせる唐土からしてみると、遠く朝鮮とも国境を接する遼東の地は、どこまでも広漠としている。草原と砂漠、そして人影はほとんどない。夜の天空と星の海は、半農半獵という特殊な生活環境にある女真の民にとり、今にも手が届かんばかりに常に眼前に展開している。

時に彼等女真の民が定めた年号によると天命三年である。西暦でいうと一六一七年、中原の地を数百年にわたって支配する明王朝の年号でいうと万曆四十五年、さらに海をへだてた遠く日本の年号でいうと江戸幕府の元和三年、二代將軍秀忠の治世である。

後に賢明なる王といメルゲンう意味で、睿親王といわれることになるドルゴン（多爾袞）は、まだ六歳の幼児にすぎない。女真の王族として生を受け、その本拠ヘトウアラ城で天空に一筋の流星を見た。

ヘトウアラ城は女真族が居住する遼東すなわち東北の地において、一代の英傑ヌルハチ、すなわちドルゴンの父にあたる人物が、一六〇三年以降居城とした地で蘇子河の南岸にある。後年興京と呼ばれる地でもある。

平地に隆起した丘の上に築城され、丘上の最高地点でも地表から約二十メートル。北側に至っては九メートルほどではない。山城であるが平城に近いのである。二重の城壁に囲まれ平面はほぼ正方形。内外の城壁は約五一一メートル、南北四六五メートルであったのに対し、外城は全長五キロほどもあったという。

ドルゴンは星に導かれるように城の外に出た。以下は幼いドルゴンの記憶の彼方にあり、事実であるか否か定かでない。草原の民は物心つくと同時に騎乗する。ようやく馬を乗りこなすことが可能になったドルゴンも、厚く織った黒色の麻の上着を着て、皮の長靴を

履き、さらに弁髪といわれる満洲族独特のヘアースタイルを風になびかせ、星が落ちた地点を目指した。

地の果てまでも続く草原を、まだぎこちないが馬で駆ける。むろん馬といっても、小型で驢馬にも等しいものではある。やがて暁が迫った。ドルゴンはそこに驚嘆すべき光景を目撃する。それは蜃気楼だった。天空の巨大なパノラマに不意に出現したのは、旗袍（チーパオ・今日のチャイナドレスの原型）に身を包み騎乗し、前方をみすえる夫人の姿だった。

ドルゴンはしばし光景に見入った。生まれて初めて幻惑されたといつてよい。そして広漠たる草原の彼方にあるものを知りたいと思った。繰り返すようだが、まだドルゴンは六歳である。満洲の地から遠く中原へ、さらにはその彼方へ、ドルゴンは己がいかな星のもとへ生を受けたかまだ知らずにいる。

英傑・奴児哈赤 と後金国の興起

中国史は、一面北方に住む騎馬民族との抗争の歴史でもあった。

遠く秦・漢の時代には、匈奴といわれる剽悍な騎馬民族が存在し、始皇帝が万里の長城を築き、その侵攻に備えたのは有名な話である。

秦・漢以来幾多の王朝が中原に出現したが、その中で純粋な漢民族によって建国された王朝は漢そして、この物語の時代中原を支配している明くらいのものである。最古の統一王朝といってよい秦の王室でさえ、遠祖をたどれば漢民族とは似て非なるものであったといつてよい。

また宋は確かに漢民族によつて建国された王朝ではあるが、軍事的には極めて劣弱であった。遼・西夏に圧迫され続け、さらにはトウングース系の金王朝によつて皇帝を虜とされ、華北の支配権をも奪われてしまふのである。自らを文明の中心すなわち『華』と称する中原の王朝にとり、金に対する敗北は国辱といつてもよい。だが宋にとつての恥辱は金に華北を奪われたことのみならず、史上空前の版図を形成し金をも滅ぼしたモンゴルの元により、残された長江以南をも奪われ、完全に命脈を絶たれたことだった。

金による華北の支配から元による中国全土支配へと、漢民族にとつての苦難が続いた。明王朝は一三六八年に元を北方へといやり、漢民族による中国再統一を実現した帝国である。この王朝は常にモンゴルを恐れた。万里の長城はまぎれもなく秦の始皇帝の時代に築かれたものを端緒とするが、今日見られるように堅牢なものとしたのは明王朝だった。

元を倒し漢や唐にも匹敵する大帝国となった明王朝。だが建国から約二世紀半を過ぎ、さしも明王朝の基盤も揺らぎはじめていた。歴世の王朝いずれもがそうであったように、宮廷内では宦官（去勢した男子）による専横が目立ち、民は度重なる飢饉そして重税にあ

えいでいた。いや明にとつての危難は内にばかりにあつたのではない。長城の北方に、明に対抗する新たな王朝が出現したというのである。

長城以北に大金国（後金国）といわれる新たな王朝が出現したのは一六一六年、日本でいうと大坂夏の陣の翌年、徳川家康が死去した年ということになる。金国を築いたのはヌルハチという名の英傑で、本編の主人公ドルゴンの父にあたる人物である。ヌルハチとは奇妙な名である。中原の漢民族は奴児哈赤と呼んだ。この四字に中原の民の憎悪の一端を読み取ることができる。

後金という国号は、奴児哈赤がかつて華北を支配した金を意識して、意図的に用いた国号である。何故金という国号を用いたのか、何をかくそう奴児哈赤等、後に満洲族と名乗る民こそ、かつて金を建国した女真族の末裔だからである。

モンゴルの元に滅ぼされた後の女真族は、長城以北でかつてに比べると、あまりに落ちぶれはてたといつてよい。細々ながら半農半獵の生活を続け、明の巧妙な分断工作により幾つもの少部族に別れ永年にわたり争いあつていた。そんな中にあり、愛親覚羅氏族に生を受けた奴児哈赤は、人物としても、一軍の指揮官としても、また政治家としても長い中国史の中でも傑出した人物の一人であつたといつてよいだろう。

一五八三年、さる不幸な事故により祖父と父を一度に失い、二十五歳にして自立を余儀なくされた奴児哈赤は、わずか六年後の一五八九年には、建州女真（当時女真族は主に三つの勢力に分かれていた。建州女真・海西女真・野人女真である）五部族を統一するに至る。

一五九三年には、海西女真を中心とした九部族連合軍をグレの戦いで打倒し、女真の諸部族の大半を支配することとなった。

それ以後も東北の地を舞台に快進撃を続けた奴児哈赤は、

ついに遊牧民の世界で王を意味する、ハーン（可汗）の地位に就き、国号を金、元号を天命とする。この年奴児哈赤は五十八歳になっていた。

この間も明王朝は衰退の一途をたどっていた。最大の原因の一つは、日本の豊臣秀吉による朝鮮出兵にあった。朝鮮への援軍派兵のため膨大な量の銀を損じた明朝は、時の皇帝万曆帝の浪費癖もあって、見る影もなく国力を失っていく。

一六一九年（天命四年）、六十一歳をむかえた奴児哈赤は、明朝から真の意味で自立するため、生涯最大の賭けにでようとしていた。

天命を背負いし者

明王朝は代々中国東北部の女真族に対し、貿易の許可書である勅書の奪い合いをさせるなどし、巧妙な分断工作をおこなってきた。結果長春・ハルピン一帯を拠点とする海西女直が四部、遼陽の東方山地の建州女真が五部族、沿海州一帯の野人女真が四部に別れ、互いに抗争を繰り広げていた。

奴児哈赤は、こうした諸部族の中にあつて厳密に言えば、建州女真のスクスフ部に属する。奴児哈赤の勃興期、明は豊臣秀吉の朝鮮出兵への援軍により、急激な勢力拡大を指をくわえて見ているより他なかった。だが日本軍が一五九八年撤兵すると、ようやく対策に本腰を入れはじめる。

明と奴児哈赤の直接の対立の契機は、まず朝鮮人参をめぐって始まった。人参と貂皮は、女真にとり明国への最も高価な交易品である。だが漢人は狡猾で、人参が腐敗する時期まで購入を控え、女真側が薄利で売りさばくまで待つ。奴児哈赤は人参を一度煮てから乾燥させるという画期的な方法で、今までの買手市場を売手市場へと転じさせることに成功する。

奴児哈赤は明側に高値での人参の買い上げを要求し、明側が拒否すると、五千の軍勢を率いて撫順までデモンストレーションを決行している。人参をめぐる明と女真の対立は年々深刻になる一方だった。

また直接女真対策にあたる遼東総兵官の李成梁という人物は、長年にわたり奴児哈赤等と良好な関係を築いてきた。だが一六〇八年、李成梁なる人物はささいな事件をきっかけに失脚。李成梁失脚を機に、明側は奴児哈赤の仇敵海西女真のイエヘ部を後押しし一気に対決姿勢を強めた。むろん奴児哈赤も黙っているわけにはいかず。ついに明との全面対決を決意することとなるのである。

ヘトウアラ城の北門から城内へ赴くと、丘の上に煉瓦造の殿舎や八角堂が目に入る。俗に汗宮大衙門といわれる公的な儀式の場で、その中央の尊王台には奴児哈赤の姿があった。奴児哈赤は龍顔鳳目にして、角ばったあご、鉄のような胸板、耳が常人ばなれして大きい。色黒で鼻はすらりとしていて筋が通っており、そして声は鐘のように大きい。幼いドルゴンの記憶にある奴児哈赤という人物は、常に慈愛に満ちた父としてではなく、部族を率いる帝王としての勇姿であつた。

一六一九年二月、すなわち女真の年号では天命四年二月、奴児哈赤は部族のおもだった者を集め、牛一頭を殺し生贄とし、天地精霊へ打倒明帝国を祈願した。幼少のドルゴンも側近に手をひかれ儀式に参加した。

奴児哈赤は黄色の朝服に身を包んでいる。黄は中原の王朝では皇帝にのみ着用品が許される神聖な色で、奴児哈赤の明への対抗意識をうかがい知ることができる。奴児哈赤が祈りを捧げ終わると同時に、整然と列をつくった楽隊が太鼓や喇叭を奏でる。

満洲では天地精霊を等しく神として崇めるが、特に文殊菩薩への信仰がつよい。おごそかな祈りの儀を終えた奴児哈赤は、参集された諸将に一段高い壇上から、

「敵は今おおいに奢つておる。そして恐らく我らを小邦と思い侮つておることだろう。なれど大国を小国とするも、小国を大国とするも、全て天命のしからしむるところ。今の明国はかつての明国と異なり、もし一万の兵あらば民は負担に耐えることはできないであろう。もし一千しか兵がおらずば、兵と民は余の捕虜となるう。天命はすでに我らのもとにある。戦は必ず勝利するであろう」

奴児哈赤は虎の咆哮にも似た声をあげた。奴児哈赤は常に『天命』というものを意識し、自らが天命を受けた者と信じ、人にも語つた。故にこそ年号を天命と定めたのである。この奴児哈赤の一声に諸将の間から大歓声があがり、同時に八種類の鮮やかな色を縁どつた旗

が、一斉に、津波のように揺れ動いた。

女真族の軍制は、世に名高い八旗制である。八旗制とは、有事の際に兵士となる成年男子三百人を一二ル（「矢」の意）とし、五二ルを一ジャラン（一五〇〇人）とし、五ジャランを一グサ（二十五ニル、七五〇〇人）とするものである。各グサは、それぞれ黄・白・紅・藍、そして？黄・？白・？紅・？藍の八旗で識別され、そのため八旗制とよばれた。

「捕らえた明の密偵をここへ連れてまいれ」

重い声で奴児哈赤がいうと、後ろ手に縛られた漢人らしき捕虜が奴児哈赤の前に引き出された。

「よいか、我等は汝等漢人に七つの恨みがある」

奴児哈赤は明国の言葉で密偵に語りかけ、指を折り始めた。

「第一の恨み。我が祖父と父が汝等の誤りにより、一度に命を失うに至った一件」

奴児哈赤二十五の時のことである。当時良好な関係にあつた明の李成梁が、ニカン・ワイランという者がこもる城を攻めるにあたり、和平交渉に赴いていた祖父のギオチャングと父のタクシを誤って攻め殺すという事件がおこった。この一件に関して李成梁は、二人の遺骸と三十の勅書、三十頭の馬を贈り謝罪済みではあつたが、奴児哈赤にとり深い心の傷となつたことはいうまでもない。

「第二の恨み。汝等是我等とイエへ部との婚姻をさまたげ、イエへ部の娘をモンゴルに嫁がせるようしむけた件」

一五九七年のことである。対立関係にあつたイエへ部は一旦奴児哈赤等に和平をもちかけ、イエへ部の娘が奴児哈赤等のもとに降嫁する段取りとなつたが、イエへ部はいつまでたっても約束を履行しようとしせず、ついには娘をモンゴルに嫁がせてしまった。イエへ部の背信を奴児哈赤は、明が裏で糸を引いているものと考え続けてきた。

さらに奴児哈赤は明人の捕虜に対し、五つの怨恨を並べた。
すなわち、

第三の恨み 明国側がお互いに国境を越えないという約束を平気で破ったこと

第四の恨み 国境を侵した越境者を処刑した報復として、明国が奴児哈赤の使者を殺害したこと

第五の恨み 明は国境近くで耕作していた満洲の民を脅迫して、追いはらった

第六の恨み 明は悪辣なイエへ部を利用して、奴児哈赤等への戦争をけしかけた

第七の恨み 明は天の公平な裁きを犯し、善を悪、悪を善としたこと

これらを見ていくと、奴児哈赤等にとっての懸案事項が、主に国境問題とイエへ部との関係であったことがわかる。

やがて側近が奴児哈赤の前に大きな木箱をさしだし、奴児哈赤が中央に開いた穴に手をいれ、一枚の紙きれをとりだした。

「これが汝に与えられた運命だ。汝にこの文字が読めるであろう」

そこには大きく『火』と書かれていた。

「助けてください。命ばかりはどうか！」

明国の密偵は地に両膝をつき命ごいしたが、許されることはなく、兵士が両脇をかかえ近くにあった大木に無理矢理縛りあげた。やがて柴に火がつけられる。狂気ともとれる悲鳴があがり、見守る側近等の中には目をそむける者もいたが、奴児哈赤は眉一つ動かすこと

はなかった。

天への誓いの儀式も終わり、間もなく座は宴席となった。

奴児哈赤も酒を口にし、したたかに酔いが回りはじめた頃、

「どうじゃ、そなた座興に舞いでも演じぬか」

と、かたわらに控える側室でドルゴンの生母にもあたる烏拉納喇氏に、やや充血した目で語りかけた。

烏拉納喇氏は名を阿巴亥^{アバイ}という。海西女真の烏拉部の出自で三十一歳である。切れ長の目はドルゴンとよく似ている。わずかだが武術もできる。旗袍に身を包み、居並ぶ将兵達も前で一礼すると剣を片手にする。白刃が月の光を吸収した。猫のようにしなやかで、しかも豹のように素早い身のこなしに、将兵達の目は釘づけとなった。奴児哈赤はじつと様子を見守っていた。見事な剣舞ではあるが、なにか物足りなさを感じてもいた。

「ホンタイジよ汝舞いの相手をせい」

と奴児哈赤は今度は自らの八男で、後継者候補でもあるホンタイジに剣舞を命じた。

ちなみに奴児哈赤には十六人の男児があり、ドルゴンは十四男にあたる。草原の民の社会において極めて特徴的なことは、長子相続性というものがなく、実力あるものが部族の長になるという暗黙のルールが存在することである。豊かな農耕民族社会と異なり、狩猟民族は常に厳しい自然環境にさらされ、凡庸なものでは例え年長者であろうと一族の長はつとまらないのである。

そうした中ホンタイジは生まれつき聡明で、奴児哈赤も一目置いていた。とはいえ、後に奴児哈赤の後継となるこの人物は二十七歳とまだ若く、後年のようにどっしりとした安定感はなく、いかにも若武者といった風格だけを漂わせていた。

ホンタイジは烏拉納喇氏と剣を交えはじめる。むろん相手は女である。適当に相手をして座興の席を盛り上げるつもりでいた。とこ

るが誤ってホンタイジの剣が、烏拉納喇氏の髪の毛の結び目をほどいてしまった。艶やかな髪が風になびく。生まれつき気性の荒い烏拉納喇氏は、瞬時にして刺激され、剣の動作が早くなった。ホンタイジは防戦に終始することとなる。

「妃、たいがいになさるがよろしい」

烏拉納喇氏の剣を力で無理やり抑えこんだホンタイジは、耳元で小声でささやいた。だが烏拉納喇氏は聞こうとしなかった。ついにはホンタイジは剣を真つ二つにされてしまう。

「己！」

かすかに微笑さえうかべながら剣を喉元につきつけてくる烏拉納喇氏に、ホンタイジは少々むきになった表情をうかべた。あわや一瞬即発かという時、一部始終を見守っていた奴児哈赤が拍手し、満座の諸将もつられて拍手を送り座興の剣舞は締めくられた。だがホンタイジは以後、烏拉納喇氏に対して複雑な感情を持つこととなるのである。

この時すでに明の主力軍約十万は、四手に分かれて後金の都へトウアラを目指していた。奴児哈赤もまた決戦を覚悟で八旗に動員令をくだした。決戦といっても、後金側の兵力は一万ほどでしかない。多くの人々が見守る中にあり、ドルゴンと母烏拉納喇氏の姿もあった。

「父上」

七歳になったドルゴンが、不意に軍の先頭をいく奴児哈赤を呼んだ。奴児哈赤は馬足を止める。

「父上、私も戦に赴きとうございます」

奴児哈赤はしばしドルゴンを馬上からじつと見つめた。むろんまだ七歳のドルゴンが戦闘に参加できるわけがない。ドルゴンは仏像のように目鼻立ちが整い、生まれつき利発だった。奴児哈赤も多くの諸氏の中でも、ドルゴンの成長を楽しみにしていた。

「ドルゴンよ、父はほどなく死ぬかもしれぬ」

奴児哈赤は本格的な明との会戦の前に不吉なことをいった。

「なれど我例え死すとも、魂は一羽の鷹となつてそなたのもとへ戻るであらう。汝生きて祖国を守れ。汝には生まれながらにして、菩薩の加護があること決して忘れるでないぞ」

そこまで言つと、奴児哈赤は烏拉納喇氏の方角をみた。

「どうかご無事で、天命の加護がありますよう」

烏拉納喇氏は両手を合わせていったが、奴児哈赤は言葉を返すことはなかった。ドルゴンはいつまでも父の背を見送った。すでに明清興廃をかけたサルフの合戦は、目前に迫っていたのである。

サルフの大会戦（一）

女真族は主に狩猟を正業とする民族である。女真族の狩猟は、あらかじめ獲物を追いこむ場所を決め黄色い旗を立て、赤・白・藍の旗の部隊が少しずつ包囲を狭める巻き狩りが主流として行われた。やがて四旗は女真族の軍団編成にとり最も重要な単位となる。

奴児哈赤は汗に即位した後、四旗にさらに？黄・？白・？紅・？藍の四旗を加え、あわせて八旗とした。八旗のうち汗である奴児哈赤自身は正黄と？黄の二旗を掌握し、他の六旗のうち正白と？白は奴児哈赤の八男ホンタイジが、正紅と？紅は次男のダイシャンが、三男のマンガルタイが正藍を、最後に？藍を奴児哈赤の甥にあたるアミンが掌握した。

奴児哈赤にとり天命四年（一六一九）は、イエヘ部族への征討戦から始まった。だが同じ頃明朝側は動きだしていた。奴児哈赤の首に一万両の懸賞金を懸け、かつて豊臣秀吉の朝鮮出兵のおり、加藤清正の籠もる蔚山城の攻城戦でも重要な役割を果たした楊鎬を大将とし、四路より十万の大軍をもって後金の領土を目指していたのである。

天命四年の二月といえば、新暦でいうと四月にあたる。海を隔てた日本では春うららかな季節にあたるが、遼東では凍てつくような寒波の時期である。一寸先の視界も定かならぬ吹雪の中、明の大軍が吐く息も白く、人馬ともに雪の中に半身をつかりながら行軍する姿があった。

四路に分かれた軍勢のうち、主力の部隊を率いる将は総兵官杜松という者である。杜松の部隊約三万は撫順関から、両軍決戦の地となるサルフ山を経てヘトゥアラを目指す計画をたてていた。

杜松の部隊の南には清河といわれる河を通過して、ヤフ関を経てヘトゥアラを目指す二万の軍勢の姿があった。この部隊を率いる者

は李如柏という将である。李如柏もまた秀吉の朝鮮出兵の際、碧蹄館で立花宗茂等の軍と戦った経歴をもっていた。

杜松・李如柏の部隊が西の方角からヘトゥアラを目指したのに対し、北部方面の靖安堡からサルフを経て進入を計ろうとする部隊が、総兵官馬林率いる二万の軍勢だった。馬林の軍勢には奴児哈赤等の宿敵イエ部族の兵一万が友軍として参陣している。

最後に南の方角すなわち寛奠を経由して涼馬佃からヘトゥアラを目指すのが総兵官劉？率いる一万の軍で、劉？の部隊には李氏朝鮮王朝の援軍一万も参加していた。劉？なる武人は、李如柏・楊鎬同様やはり日本軍と戦った経歴があり、朝鮮の李舜臣とともに小西行長の順天城を攻めたこともあった。朝鮮王朝の軍が参陣したのは、むろん文禄・慶長の役の通りの明の援軍に対して報いる意味合いが強い。

さて奴児哈赤はイエへの領内に侵入して二、三の小城を落としたが、明軍動くの報に接し急ぎ馬首をかえし、先発部隊のダイシャンに命じ、サルフ並びにジャイフィアの両山へ砦を築かせた。明の主力部隊を率いる杜松にとり、後金軍の動きが気かりでならない。「恐れながら他の部隊の到着を待つてから動くべきではござらぬか。今はみだりに兵を動かすべきではござらぬ」

側近がはやる杜松をたしなめた。杜松が撫順関からの単独出撃を主張し始めたからである。側近等は口をそろえて反対した。

「やかましわ己等、敵が眼の前で砦を築いて万全の備えをとろうというに、指をくわえて座視するという軍法がどこにあるか。たがが女真の兵ごとき、わし一人で十分じゃ」

杜松は知恵もあり、勇気もあり胆力もある。ただ血気にはやるとこがあり、陣中でも平気で大酒を飲んだ。酒が入ると杜松は誰の意見にも耳を貸さなくなり、自らの作戦に異をとねえる者に平気で刀をむけた。すでに杜松は相当な酒がはいっている。側近等は杜松をいさめるこの不可能をさとらざるをえなかった。

二月二十九日夜半、杜松は他の部隊と連絡を取ることもなく、ついに三万二千の軍勢をもつて撫順関を出撃する。杜松自ら率いる部隊は二万、厳寒の闇の中三十五キロにも及ぶ強行軍だった。残余の兵約一万は、重兵器や弾薬、糧食を擁し、主力より半日遅れての撫順出撃だった。

三月一日には早くもフン河に達したが、すでに部隊の大半は疲労の色が濃くなっていた。しかも休むことなく冬季の渡河作戦という難題が待ちかまえていた。ちょうど河は解氷期にはいつており、人馬ともに渡河は容易ではない。多くの兵が溺れ死ぬ中、泥酔した杜松には将兵達の疲弊など眼中になかったのである。

後陣の奴児哈赤のもとには偵察部隊を通じて、明軍の動きが逐一報告される。三月一日の未明には、撫順方面の偵察部隊から、明兵とおぼしき篝火が多数移動しているという報がもたらされた。さらに時を経ることなく明軍がサルフ山を占拠したという報せがはいった。サルフ山の後金軍は大半は戦闘員ではなく、明軍に対して若干の抵抗はしたものの、ついにはジャイフイアン山に後退したのである。だがジャイフイアン山でも明側の攻勢を支えきれず、ジャイフイアン山の東に接するチリンハダの崖まで撤退したという。

明の杜松の軍勢はサルフ山を占拠した後、三手に分かれて作戦を継続中だった。すなわち、杜松自ら自らが指揮する一万はチリンハダを囲み、火器を装備した一万はチリンハダと川を隔てたサルフの山上に残り、約一万の輸送隊はその西方にあるという。

杜松の軍勢の動きに先だつて、奴児哈赤のもとには南路から迫る劉？と朝鮮の連合軍の動きももたらされていた。

「ホンタイジよ、明の軍勢は西と南から我らを挟撃する腹と見た。いかにして敵を防ぐべきとおもつか」

と奴児哈赤は、かたわらに控えるホンタイジにたずねた。

「されば南からの明兵は、おそらく我等を牽制しようとするものでござりましょう。それに対しては既に派遣してある五百の我が兵で十分かと。撫順関から来る西の大軍こそ敵の主力でござります。まずこれに当たることが急務かと」

ホンタイジの言葉に奴児哈赤は深くうなづいた。

「いかにも、西軍こそ我らにとつて最大の敵である。我ら然るべき後に西軍を撃破すれば、他路の敵は恐るるものではない。みだりに兵を分散させるこそ下策」

奴児哈赤はただちに、アミン、マングルタイ、ホンタイジの諸王子に出撃を命じた。わずか数百の非戦闘員をヘトウアラ城に残しての後金軍総力をあげての出撃だった。

撫順方面へのルートを急ぐ奴児哈赤のもとへ、不意に一羽の鷹が急降下しまい降りた。遼東には海東青という珍しい鷹が生息している。奇妙なことに奴児哈赤の肩に止まった海東青は紅にくちばしを染め、赤く染まった腕輪らしきものをくわえていた。紅は奴児哈赤の次男ダイシャンの？紅の旗を意味する。すなわち天空から飛来した海東青はダイシャンが奴児哈赤のもとへ託したもので、血に染まった腕輪は、明軍の猛攻にさらされたダイシャンの奴児哈赤に対する訣別を意味していた。

奴児哈赤はしばし沈黙した後、一本の矢を鷹のくちばしにはさみ天へと帰した。いわば奴児哈赤流のダイシャンへの返答であり、戦って死することこそ本懐とせよという意味をこめていた。

鷹は風のようにダイシャンの陣へ戻り、奴児哈赤の意を伝えた。

奴児哈赤の矢を受け取ったダイシャンは実によく力戦奮闘し、さしも歴戦の將杜松をもつてしても攻めあぐねた。

奴児哈赤の行動は敏速だった。わずか六時間で五十キロを走破する神業に近い行軍速度で、日没前にはサルフ山を望見するグレの野に到達した。むろん全軍騎兵からなる後金軍だからこそなしえたものだった。

「さて、敵は三手にわかれておる。汝はいずれから攻めるが得策と
思つかマングルタイよ」

と奴児哈赤は、今度は三男で正藍旗を預かるマングルタイに尋ね
た。

「さればチリンハダの味方が苦戦しております。敵將杜松は攻囲
軍の中にありますれば、まずこれを破るために全力をつくすべきか
と」

「それもよからう。なれどわしは、こたびの戦サルフを制する者が
勝ちを制すると考えておる。恐らく敵はまだ我等の到着を知らずに
おるだろう。最も恐るべきは敵の火器じゃ、敵が火器の配備を完了
する前に、我等迅速にサルフの敵を叩くが肝要」

さすがに歴戦の將奴児哈赤の言は強い説得力があつた。奴児哈赤
は各王子達に率いられた主力部隊とともにサルフ山を目指す。日没
の二時間前、薄明かりの中、ついに後金軍はサルフ山に到達した。

「全軍突撃！」

奴児哈赤の号令とともに、開戦を告げる銅鑼や太鼓がサルフ山に
響きわたつた。

「嘘であろう……？」

チリンバタ山で、突如サルフ山に出現した後金主力部隊に、杜松
は動揺を隠せなかった。大将不在のサルフの明軍の混乱は、さらに
想像を絶していた。明軍の不幸は、ようやく配備された大砲や鉄砲
などの火器が、小雨のため使用できなかったことだった。この戦い
の模様を後金側の史書は、

『五旗の兵が稻妻のようにサルフに進出し、敵の陣に砲、小銃を幾
重にも並べられ待ち受けていたのにも拘らず、少しもためらわず全
く止まることなく進み、山頂に到るや否や、遮二無二突撃し瞬時に
して皆殺しにし、山はたちまちのうちに血で赤く染まった』

と後金側の電撃作戦を伝えている。

サルフ山を巡る攻防は後金軍の圧勝で幕を閉じた。勢いにのった奴児哈赤等五旗の部隊はフン川を渡り、ジャイフアイ山の杜松軍の背後を突いた。さらにすでにジャイフアイ山に進出していた二旗の部隊も、フン川の支流蘇子河を渡河し、杜松軍の側面を突く。さらに今まで劣勢を余儀なくされていたダイシャンの部隊も攻めかかり、ここに後金側の包囲が完了した。

この非常事態の中にあっても、明将杜松の闘争心は衰えることをしらない。すでに死を覚悟した杜松は末期の酒を樽ごと飲みほし、槍ではなく巨大な鉄槌をもって群がる後金軍に応戦し、鉄槌が使えなくなるや、素手で応戦した。さしも後金軍も杜松の気迫の前に押されはじめる。この時川を背にし、栗毛も鮮やかな通常より巨大な馬にまたがった将が杜松めがけて弓を構えた。ダイシャンだった。「父上より託された矢受けてみよ」

ダイシャンの放った一撃は、見事杜松の額を貫通した。杜松の死に明軍の全軍が崩壊するまで時はかからなかった。

戦後奴児哈赤は敵将杜松の死体を改めて見聞した。

「この者は最後まで勇猛だったと聞く。敵の勇者への敬意だ丁重に葬るがよい」

草原の民は常に勇ある者に敬意を表するのが慣わしである。奴児哈赤もまた、杜松の骸に一時手をあわせた。だが天下分け目のサルフの合戦が終焉をむかえたわけではない。北路・南路・西路の三方より新たな明軍がヘトウアラ目指して進出しつつあったのである。

サルフの大会戦（二）

さて、明軍総大将楊鎬と右翼南路軍大将劉？は途中フチャという場所で軍勢に小休止を命じていた。そこへ伝令が慌しくかけこんできて一大事を伝えた。

「なんと、杜松が死んだ」

サルフでの味方の部隊の総崩れの報に、しばし楊鎬は茫然自失の体となった。

「三万もの軍勢が一日の戦闘で消滅するとは、敵は想像以上に手強い。ひきかえ我等の損害は大きい。ここは一旦兵を引き上げるべきかもしれん」

すでに老齡の楊鎬は思わず弱氣の言葉をもらした。

「待たれよ、いかに主力部隊が壊滅したとはいえ、ここで一戦もせず兵を退くは陛下に対し、不忠とは思われんのか」

と真つ先に反論したのは総兵官劉？だった。両者は以前から馬が合わず、軍議の席で対立することもしばしばだった。

「まずは拙者に全てを任せていただきたい。この劉？雲南・四川での反乱を鎮圧したこともあれば、朝鮮で倭国の軍勢と戦った経験もある。戦の駆け引きに及んでは、奴児哈赤なる者等に決して後れをとることはござらぬ」

「なにを申すかと思つたら、汝は朝鮮での戦のおりは敵の小西とか申す者に買収され、突如撤兵したと聞いたが相違ないか」

この軍議には友軍としてかけつけた朝鮮の將軍達も多数列席していた。彼らの前で面目を失い、劉？は顔色を変え、

「なんと、貴殿こそ倭国の加藤清正が守る、まだ建設途上の城さえ攻め落とすことができず、しかも敗戦を勝利と偽って投獄されたこと、よもやお忘れではあるまいな」

と反撃した。楊鎬もまた血相をかえ、

「己、許せん」

と剣をぬいた。楊鎬が刀をぬくと劉？も剣をぬき、あわや一瞬間発というところで朝鮮の將軍達までもが割って入り、ようやく事なきをえる。だが楊鎬はやはり大軍を率いる器ではなかった。明側の足並みの乱れは、奴児哈赤等につけいる隙を与えることとなるのである。

一方総兵官馬林に率いられた北部方面軍二万とイエへの援軍一万は、開原を出発して後金の領内に侵入。三月一日にはシャングァン崖というところまで達したが、こちらサルフでの敗戦がすでに伝わっており、士気は低下する一方だった。

明軍現るの報は、ただちにダイシャンの知るところとなる。馬林の兵は小高い山の上に三重の濠をもつけ、その外側に鉄砲・大砲などを配備し待ちかまえているという。直ちに伝令が奴児哈赤のもとへ走る。奴児哈赤は敵の布陣を冷静に観望し、近くの明軍を見下ろすことができる山を占領し、そこから敵の本隊へ攻めくだるという作戦を立てた。むろん明軍を黙っているわけがなく、ダイシャン率いる二旗の部隊と激戦を展開した。明軍はさかんに火器をもって応戦するも、援軍として他の六旗もかけつけると、ついに支えきれず馬林自身も逃走した。

馬林の軍勢をけちらした奴児哈赤は、そこから西へ一キロのフイエフン山へ進出する。そこには明の残兵一万の姿があったが、こでも奴児哈赤の作戦が功を奏する。さかんに火器で応戦する明兵に対し、後金側では兵を三段にわけける。第一陣は重厚な鎧に槍・刀を持った部隊で、第二陣は薄手の鎧に槍・刀の部隊、そして最後尾に騎馬を主体とする部隊が続く。まず歩兵部隊が敵の火力を排除した後、騎馬の部隊が突撃を敢行するわけである。

作戦は成功し、ここでも明軍とイエへの援軍は壊滅した。後金軍は大戦に二日続けて快勝した。

杜松の部隊に続き、馬林率いる左翼北路軍も壊滅したという報せ

は、総大将楊鎬をして戦意を喪失させることとなった。楊鎬はただちに残存部隊に総撤収を命じる。李如柏率いる右翼中路軍は、ただちに引き上げに応じたものの、すでに劉？率いる一隊は楊鎬の命令を無視して敵地奥深くへと潜入していた。まさに奴児哈赤の思うつぽだった。

奴児哈赤の甥にあたるアミンはワルカシという場所で劉？の部隊と遭遇。全軍を物陰に伏せてやり過ごした。再び伝令がダイシャンのもとへ走った。劉？もまたダイシャンの軍に気付き、近くのアフダリ山という山の頂で総攻撃の体制を整える。

一方ダイシャンはアミンそしてホンタイジと協議の上、山を三方から包囲し、夜襲をかけるてはずを整えた。

アミンの部隊は北方の厳しい寒気が肌を刺激する夜明け前、息を殺して山の頂を目指す。アミンもまた勇猛をもって知られた後金の若き武者である。ところがここに想定外の難題が待ちかまえていた。

「將軍一大事にござりまする」

先発していた物見が、息を切らしながらアミンの馬の前で平伏した。

「我等の行く手を巨石が阻み、進軍するのは不可能でござる」

果たして巨石は、アミンをあざ笑うかのように立ちふさがっていた。

「うぬ今回の作戦は他の二軍と息があわねば成功はおぼつかない。

我等ここで足止めをくっている余裕などないというに」

アミンが困惑していると、突如として大雨が降りだし雷光が暫時天をさいた。不意に後金の兵士達の間から驚きの声があがった。

「見る龍だ！ 龍が天を移動していくぞ！」

アミンが見上げた天空の先に、まぎれもなく一匹の龍が眼光をいからせていた。アミンは不意に兵士達に後方にさがるよう命じた。そして剣をぬくと天に祈った。

「軍神よ、どうか我に加護を」

しばし祈ると、不意に凄まじい勢いで落雷が眼前を阻む巨岩を直撃した。岩は粉々に砕け散り、明軍が待ちかまえる山頂へと続く道がアミンの前に開けた。

「者共進め！」

驚くべき奇跡に、後金の兵卒達は勇を奮いおこされ、怒涛のように山頂の劉？の部隊に殺到する。

「恐れながら、背後に敵襲！」

物見が慌しく大事を報せる頃には、劉？はまだ夢覚めやらぬ中であつた。

「恐れながら、西の方角からも敵襲にござりまする」

明軍はただちに火器をもって応戦しようとするも、おりからの雨で役にたたない。夜が明けきる頃には大勢はほぼ決していた。劉？は乱戦の最中討ち死にした。

自軍が壊滅したことを後続の部隊は、まだ知らずにいた。約二万の明・朝鮮の連合軍は富軍フチャという場所にあつた。時を経ることなくダイシャンの部隊が殺到する。だが明軍がほこる火器の前に後金の騎兵は機動力を封じられ、次第に苦戦を余儀なくされる。特に後金軍を苦しめたのが仏郎機砲といわれる、ポルトガル製の大砲だつた。仏郎機砲は鉄製で、長さ五、六尺（一尺約三十一センチ）ほどである。

仏郎機砲が従来の中国の大砲と比べ優れている点は、まず母銃と子銃を組み合わせることによつて、母銃の大きさによる射程の長さや勢いと、子銃の詰め替えによる発射間隔の短さを共に実現したところにある。また砲筒の壁が厚く、発射時の圧力に耐えうる安全性を持ち、さらに照準具が備えてあり命中率が高い。木架に取り付けて射角を調整できるなどであつた。

仏郎機砲が炸裂するたび馬は叫びをあげ地に付し、あれいは前足を蹴りあげ後金兵を振り落とした。

ところが奇跡は再びおこつた。突如として凄まじい突風がおこり、

砂塵が一寸先の視界をもゼロにした。戦場は瞬時昼であるのか夜であるのかさえ定かならぬ様相をていしたのである。ダイシャンはむしろ、ここを好機と判断した。

「今ぞかかれい！」

体制を立てなおした後金騎兵は、瞬時にして、まるで疾風迅雷のように敵の陣に殺到する。明側の陣はこの異変に次から次へと破られ、砂塵が止む頃には大勢は決していたといっている。明軍は雲散霧消したのである。

すでに後続の李氏朝鮮の部隊に戦意はなく、降伏した後へとウアラに護送される。こうして世にいうサルフ戦役は後金側の圧勝で幕を閉じた。

この合戦における奴児哈赤の戦略は極めて的確で、敵の戦力を分散しての各個撃破の典型例として、今日なお欧米の士官学校等で教材となるほどである。一方明側は各将がそれぞれ全く連携がとれておらず、いわば敗れるべきして敗れたというべきであろう。奴児哈赤の目は戦勝の後、遼東の沃野へと見開かれるのである。

烏拉納喇氏の憂鬱

奴児哈赤に率いられた後金の部隊はサルフ戦役を終えた後も、勢いとどまることを知らなかった。六月には開原に進出し、サルフ戦ではかるうじて命を拾った明将馬林を滅ぼす。そして貴金属・衣服・家畜等おびたしい数の戦利品が後金の都ヘトウアラにもたらされることになる。

だが奴児哈赤は一方で、ヘトウアラからサルフ戦役の激戦の地でもあるジャイフィヤンへの遷都を計画していた。ジャイフィヤンは渾河と蘇子河の合流点に位置し、最高地点三四メートルと、さして高くもない現在鉄背山といわれる山の頂にあつた。ただし南北両面は崖となっており、防御には好都合ともいえるだろう。現在城壁の一部、烽火台、点将台が残っている。

遷都の後も奴児哈赤は休むことを知らない。七月には明の領内で開原から南へ三十キロほどの鉄嶺へ進出し、かつての遼東総兵李成梁一族の本拠地に打撃を与える。さらに八月には、奴児哈赤の全女真統一の前に立ちはだかる最終の敵、イエヘ征討にふみきるのである。

イエヘの本拠地は現在の吉林省梨樹県にあつた。東西二城を拠点とし、そのうち西城はナリムブルという者を主とする城である。『万曆武功録』という明側の資料は西城の構造について、『ナリムブルの城は全部で四重の城壁があつて、他に木の柵があつた。平地には石で築かれた外城があり、外城の内と外には木の城壁と柵が作られ、これら城壁は三重の壕により囲まれていた。外城の中央には切り立った山があつて、その上に石造の内城壁（城壁の全長約八百五十メートル）が築かれており、その中にも木の城壁が一重存在した。そして木城の内部には極めて特徴的な八角形の望楼が存在した』と記している。

一方東城はブヤングという者を主とする城で、西城から東へ約二キロ、広大な平地の中にあつて二メートルほど隆起した台地の上に築かれていた。城壁の全長約九百メートル、城門が二箇所あり、翁城の設備も存在したらしい。

天命四年（一六一九）八月二十二日、奴児哈赤率いる後金軍はギンタイシの籠もる西城を大軍でもって包囲した。降伏を勧告したが、ギンタイシは頑として応じなかったので、ついに両軍決戦となった。後金軍は鉄製の鎧・兜の上に厚い木綿の防具を装着した兵が先兵となり、薄い鎧を着た兵が後に続き山頂を目指す。一方守備側の兵士達も必死である。弓矢はむろんのこと、丸太や火のついた薪束さらには巨石とありとあらゆるものが攻撃手段として動員される。だが兵力の差はいかんともしがたい。

未明攻防が始まり、昼過ぎには守将ギンタイシは最早これまでと、家族とわずかな兵とともに高台にある八角楼に向かった。自ら弓を引き後金兵数名を倒したが、埒があかずとみて建物に火を放つ。しかし死にきれなかった。焼けどを負い姿を現したところを捕らえられ、ほどなく絞殺されたのである。

一方東城はというとホンタイジやダイシャンに率いられた精鋭部隊が攻めかかるも、城はなかなか落ちない。だが西城が落ちたという報が流れると、城将ブヤングをはじめとして将兵の多くが意気消沈し、ついには降伏を申し出る。ブヤングは奴児哈赤の前に出頭したものの片膝をたてたままで叩頭もしない。焼酎の杯を与えたが口を近づけただけで飲みほそうともしなかった。奴児哈赤は一命を助けるつもりでいたが、ついに処刑を決意した。ブヤングもまた絞首刑となったのである。こうして奴児哈赤等の悲願であつた全満州族の統一は、ついに達成されたのであつた。

天命五年（一六二〇）春になり、奴児哈赤は突如として再遷都す

る。場所はサルフである。そして翌天命六年（一六二一）には一氣に瀋陽まで攻め上がり、なんと一日にして制圧。余勢をかつて遼陽をもわずか二日の戦闘でもって武力制圧する。結果河東の七十あまりの城が、戦わずして奴児哈赤の軍門に降った。まことに奴児哈赤の鬼謀は神業といってよい。そして遼陽を陥落させると、あっさりとサルフを捨てまたしても、この地に遷都する。だがなおあきたらず、遼陽から太子河を挟んだ地に東京という地に、新たな都の建設にとりかかる。天命七年（一六二二）二月のことだった。

東京城はサルフや遼陽等の後金の都がいずれも、いわば山城だったのに対し、初めて都市をすっぽりと飲みこむ形の城塞都市であったということで興味深い。平地に隆起した丘の上に築かれ、高度差は最大でも四十メートルほどしかなかった。都市構造としては完璧な方形ではなく菱形に近く、城壁は全長約九百メートル、高さ約六メートルほど。東西南北に二つずつ八つの門があり、それぞれ内治・撫近・懷遠・外攘・徳盛・天祐・福勝・地載と名づけられていた。

ヘトウアラからジャイフィヤン、サルフ、遼陽、そして東京へ、遷都を繰り返す間、奴児哈赤は後金国の後の世の姿を脳裏に思い描いていたであろうことは想像に難くない。だが奴児哈赤の苦悩は他にあった。

ようやく完成したばかりの東京の都城で、奴児哈赤は久方ぶりにドルゴンの生母烏拉納喇氏こと阿巳亥と閨を共にした。両者は約二メートルほどのオンドルの上で長い夜を過ごしていたが、やがて奴児哈赤は馬乗りになった阿巳亥相手に行為に及ぼうとし、苦しそうに息をした。

「今日は気のらぬ。そなたは下がれ」

不意に立ち上がった奴児哈赤は不機嫌そうにいった。辮髪が激しく乱れていた。無理もないことである。一代の英傑もすでに六十三、

性的能力は限界に近づいていたのである。阿巳亥はなんと言葉をかけてよいかわからず、奴児哈赤の背にしなだれかかった。だが奴児哈赤はすぐにそれを払いのけた。阿巳亥は無言のまま部屋を後にする。今がまさに女盛りの阿巳亥にとり、老いた奴児哈赤以外に性の対象がない宮廷生活は、あまりに空しい日々でしかなかった。

奴児哈赤はすでに年老いたが、奴児哈赤の後継者となる後金国の将来の担い手達は、健全に成長しつつあった。

十歳になったドルゴンは天空を飛来する鳥達の群れをあくことなく見つめていた。

『鳥達の世界には国境という概念はない。何故人は狭い土地をめぐって争うのか』

ある日ドルゴンは疑問を母阿巳亥に問うてみた。阿巳亥は答えることができなかった。当時後金は隆盛期にあつたとはいえ、まだ小国に過ぎず、万里の長城の彼方には他を全ての飲み尽くすかのごとき大國明があつた。またモンゴル・朝鮮もまた後金国を挟むようにして成り立ち、さらに明国より南には、ビルマやチベット等後に後金と密接なつながりを持つ国も存在した。時あたかも西欧諸国も、そろそろアジアに関心を持ち始めた時分でもある。幼いドルゴンはまだ自分が、この広大な世界の一つの点にすぎないことを知らずにいた。

幼いドルゴンの遊び友達に豪格という者がいた。豪格の父は奴児哈赤の八男ホンタイジである。つまり豪格はドルゴンにとって甥っ子ということになる。だが兄弟といってもホンタイジとドルゴンでは二十も歳が違い、甥であるはずの豪格はドルゴンより三つ年上であつた。

ある日ドルゴンと豪格は近隣の年少者を集め、それぞれが大将となり雪合戦をおこなう。たまたま豪格の父ホンタイジが馬で側を通りかかり、丘の上から側近とともに観戦した。

「若君の側が優勢にござりまするな。敵の部隊はこのままでは合戦でいうと総崩れといったところでございましょうか」

側近が興味深く様子をうかがいながらいうとホンタイジは、

「いや、あれをよく見ろ」

ホンタイジが指さす方角に側近が目をやると、ちょうど左右に雪が隆起してできた巨大な壁があり、背後に少年達が隠れていた。やがてドルゴン側の少年達が逃げこんでくるや伏兵（？）が出現し、豪格の子分達を挟撃する。豪格はややむきになったのか声をはりあげ味方を叱咤し、ほどなくドルゴン側の少年達は再び逃げ出した。ところがまたしても罠があつた。なんと落とし穴である。豪格自身も穴に落ちたところを上から雪玉を雨、あられと落とされるはめとなつた。

「遊びとはいえ、若様にあの仕打ち許せませぬ」

側近が愚痴をいうとホンタイジは、

「いや、しよせん子供同士のこと我等の出る幕ではない。それよりあのドルゴンとか申すもの知恵があるわい。ゆくゆく役に立つかもしれぬ。それにひきかえ我が息子は、愚かとまではいわぬが、ちと単純にすぎるかもしれぬ」

ドルゴンは父奴児哈赤に年少ながら才氣を愛され、一目も二目も置かれていた。ホンタイジもドルゴンが只者でないことをうつすらながら悟つた。同時に複雑な心境を抱かざるをえなかった。年齢に差があるとはいえ、ドルゴンがやがて成長すれば、後継者を巡る自らの立派な競争相手である。ゆくゆく争わねばならぬかもしれぬ。両者の間の奇妙な宿命がすでに始まっていた。

ドルゴンには二つ年下の弟がいた。名を多鐸トルという。多鐸には兄弟のように親しい遊び相手がいる。名をウランといった。ウランは捨て子である。烏拉納喇氏に拾われ、将来侍女となるべく養育された女性だった。年はウランの方が三つ上でだった。

「帽子を返して！」

ウランが悲鳴にも似た声をあげる。

「嫌だね！」

両者は今日もまた夕暮れ時まで馬でかけ続け、暗くなる頃、草わらで唇をかわしていた。むろんたわむれごとに近い恋である。ただ肉親の情愛の薄いウランは、どこか早熟なところがあった。唇を吸われた多鐸は頬を真っ赤に染め、

「姉……」

と、何事かをいおうとしたが言葉がとぎれた。

ちょうど春浅い日のことである。ふとウランが気がつくと、目の前に氷のはった小さな池があり、ウランが今まで見たこともない一輪の花が咲いていた。ウランは池に足を踏み入れた。

「危ないよ！」

多鐸が叫んだ時は遅かった。薄くはっていた氷はたちまちのうちにひび割れ、ウランは水中で必死にあぐらはめとなった。不幸にして多鐸は泳げない。助けを求めに近くの村まで必死に走る途中、たまたま豪格と出会い、かろうじてウランは豪格によって救助された。ウランはこの一件により豪格に淡い恋心をいだと同時に、多鐸に対しては自分を見捨てたものと思い、以後心通わす機会が少なくな

った。

一月、二月ほどたち、ウランは多鐸に復讐する。ある日ドルゴンと多鐸が馬でかけ比べをすることとなった時のことである。ウランは多鐸にわざと気性の荒い暴れ馬に乗るようすすめ、疑念を抱かず馬に鞭をいれた多鐸は、ほどなくふりおろされ腰を強打し失神するはめとなった。さしたる負傷ではなかったものの、心に受けた傷のほうがおおきく、以後、多鐸は内気な青年として成長していくこととなるのである。

天命七年という年、奴児哈赤は遼陽と並ぶ遼東地方の拠点都市広

寧の攻略に明けくれた。八旗の主はいずれも奴児哈赤に従軍したが、ただホンタイジのみは軽い病を患い城での留守となった。

さて病も快方に向かい始めたある日ホンタイジは気晴らしのため、夜半馬で一人周囲を散策し、湖のほとりで奇妙な光景を目撃することとなる。鏡のように澄んだ湖面に人影らしきものを見たのである。

「気のせいかな？ まだ病が完全に癒えてはおらぬようだな」

ホンタイジは思いなおして馬首を返そうとした。ところがである。不意に朦朧とした暗雲の間からかすかに月の光がのぞき、水面にうかんだ一人の夫人の顔を照らした。瞬時ホンタイジは湖に一輪のすみれの花が咲き、夜の精がそこに生命を宿そうとしているかのような錯覚を覚えた。

「あれは妃ではないか」

しばし目を凝らしたホンタイジは思わず驚嘆の声をあげた。夫人は上半身一つもまとわぬ体にして、湖面を飛魚のように自由に遊泳していた。それはまぎれもなく阿巳亥だった。

やがて湖から陸にあがった阿巳亥は、馬上自らを見下ろす、筋骨隆々たる武人らしき影に気付き瞬時にして蒼白となる。本能的に胸を手でおおった。ホンタイジは貂の毛皮を阿巳亥に向かってほうり投げた。

「妾とはいえ、父上の留守を守る身がこのようなところで、しかもかような出で立ちで、一体これは何事か」

ホンタイジは静かに、だが冷厳に語りかけた。

「今の私は籠の鳥も同然、なれどせめて今宵一夜たりとも、己が気のおもむくままふるまってみたかった」

阿巳亥の声は重く苦しかった。

「不覚にもかような姿を見られてしまい、恥辱をこうむるはめになった以上、もはや生きてはいけぬ。かような浅ましき我が身を成敗するがよい」

ホンタイジはしばし困惑した。果たして真に死を覚悟しているのか、真だとしても今ここで阿巳亥を自らの手で成敗するわけにもいかない。やはりこの不始末は父奴児哈赤に委ねるべきであろう。だがふと瞬時のことである、水に濡れ夜霧に浮かぶ阿巳亥の痴態がホンタイジの情欲を強く刺激した。剣をぬき阿巳亥の自由を奪ったホンタイジは、不覚にも本能が命じるままの行動をとる。ホンタイジが犯した一夜限りの過ちだった。阿巳亥は最初驚きというより放心状態となり、やがて抗うことなく身を委ねた。雲間からくつきりと姿を現した満月だけが、闇夜の信じがたい光景の目撃者となった。

明朝・斜陽の皇帝

目を中原の明王朝に転じてみたいと思う。

明の国都北京は、十世紀契丹族の遼の五京の一つになって以降、今日に至るまで続く千年の都である。遼が滅んだ後、元の時代には大都と呼ばれ、明の国都は建国当初南京に置かれたが、三代皇帝永楽帝により遷都され、以後天下の中心となった。

明の政庁は紫禁城である。今日故宮博物館と呼ばれているが、総面積七十二万平方メートル。東面五・五キロ、西面四・七キロ、南面七キロ、北面六・八キロもの城壁をもつ壮大な都城である。

この巨大な都城は世祖こと永楽帝により建造された内廷と、その後建造された外朝に大きく分かれていた。中でも外朝の大和殿（明代は奉天殿）と内廷の乾清宮は、王朝の各種儀礼を司る、最も重要な建造物とについていい。紫禁城の正門午門を通り、緩やかにカーブをえがく内金水橋をぬけると、高さ三十六メートル、正面約六十六メートル、奥行き三十三メートル、三層に築かれた白大理石基壇のうえにそびえたつ大和殿に至る。大和殿は天子の正朝として元旦・冬至・万寿（天子の誕生日）を司ったといわれる。また内廷の乾清宮は皇帝の住居であり、実際に政務が行われ、各種使節の引見もここで行われた。

紫禁城の壮麗さを見る者の心をうつ。だがそこは地上の主の居住空間であるとともに、血生臭い宮廷陰謀が繰り返される世の地獄でもあった。

明の十四代皇帝は神宗・万曆帝という。明代に名を知られる数多い暗君の中でも、最たる者といわれる神宗も、幼少時は聡明にして、周囲から将来を期待された存在であったといわれる。

神宗には厳格な家庭教師がいた。名を張居正という。やがて神宗が帝位に就いた時、張居正は実権を握り、政界の第一人者にまでな

つた。皇帝たる神宗も、帝王教育をほどこした厳格なる教師張居正には頭があがらない。張居正が実権を握ってから五年、すなわち万曆五年（一五七七）頃には、明の国政は極めて安定したものとなった。太倉には十年分の粟が満ち、国庫には四百余万両もの余剰の収入があつたといわれる。明国をとりまく国境問題も収まり、明の国威はいやがうえにも高まつた時期であつた。

だが張居正死後反動が来た。厳格な教育を受け聡明であつたはずの神宗が、希代稀にみる暗君に変貌したのである。『神宗万曆年間、皇帝はただ、酒、色、財、氣のみこれを求む』と明記にあるように酒色に溺れ、天下の民からの搾取にのみ情熱をかたむけたのである。それだけではない。死に至るまでの二十五年間、一度も政務の場に姿を現さず、全ての朝廷の儀礼が皇帝不在のまま行われるという異常事態となつたのである。

こうして皇帝が紫禁城の奥深くにある間にも危機が進行していた。俗に万曆の三征といわれるもので、寧夏でのモンゴル人將軍ボバイの反乱、貴州での楊応龍という者の反逆、そして豊臣秀吉の朝鮮出兵にともなう援兵派遣である。そして中国東北部では女真の国威が日に日に強大となる。神宗・万曆帝はこうした危機的状況にあつても、政治にまつたく関心を示さず、ただ自らの蓄財のみに没頭した。

万曆四十八年（一六二〇）、神宗は死の床にあつた。神宗は真に哀れな帝王であつた。張居正の死後、諫言をこころみる賢臣の一人すらなく、側室鄭妃を偏愛し、ついには第一皇子常洛を廃し、鄭妃の子常洵をたてようとすらしめた。皇帝の関心は現実の政治のことではなく、もっぱら死後の世界のことにあつた。

ついに死が目前に迫つた時、神宗は奇妙な夢を見た。身は雲の上にあり、童女に手をひかれ蓮の葉が浮かぶ浴槽に導かれる。童女に服を脱がされ神宗は湯に浸る。驚くべきことに浴槽の底はエメラルドになつていた。やがて眼前の深い霧が晴れると桃の香りがした。

不意に神宗はそこに、シルクの衣装を身にまとい大理石の椅子に腰かけ、琴をはじく一人の夫人を見る。夫人は濃い紫色の髪に、瞳はどこか空ろで、この世のものとはいいいようのない雰囲気をかもしだしていた。やがて夫人は服を脱ぎはじめ。夫人とともに湯につかり酒をすすめられ、ほろ酔いかげんになった時のことである。不意に夫人は布を神宗の首に巻きつけ、痛みを感じる間もなく神宗は絶命した。

万曆四十八年（一六二〇）七月二十一日、神宗・万曆帝崩御、享年五十八歳。現在、北京から四十キロほどのところに、明の十三人の皇帝の墓である十三陵がある。なかでも一際目をひくのが神宗・万曆帝の定陵である。八百万両という膨大な量の銀をもって造られたもので、地下宮殿に前殿・中殿・後殿・左背殿・右背殿がしつらえられており、いずれもが大理石でできている。さらに貴重な玉帯・金香合・金塊・銀銭なども出土しており、万曆帝の死後の世界にかけた情熱と同時に、当時の人民の怨嗟の声が聞こえてくるようである。

後世の人はいう。『明の滅びたるは、実に神宗に滅ぶ』と。神宗の死後、傾いた明の国威はついに回復することはなかったのである。

悪宦官と女狐（前書き）

今回の話は、一読して気分を害される方もいらっしゃると思いますので御注意ください。明代というより、中国史を語るうえでさけて通れない宦官にまつわる話です。

悪宦官と女狐

万暦帝亡き後、長子常洛が帝位についた。泰昌帝である。そして泰昌帝の長子由校が皇太子となった。だが泰昌帝は皇太子を愛していなかった。皇太子は生来愚鈍で、しかも皇族の身でありながら、大工仕事を専ら好むという一風変わった人物であったといわれる。

ある日、皇帝と皇太子はささいなことで口論となり、ついには皇帝が皇太子を杖で殴るという事態にまでなった。明代ほど皇帝の独裁権が強かった時代は他になく、廷杖といい、臣下に非礼があると皇帝は杖をもつて、衆人環視のもと殴つてもいいしきたりとなっていた。だがいかになんでも皇太子が殴られるのは異常である。場に居合わせた朝臣が止めに入り皇太子はかろうじて、その場だけはきりぬけることができた。

この光景を目撃し不安にかられる者がいた。皇太子の乳母客氏と対食関係、すなわち夫婦といつてもいい宦官魏忠賢だった。宦官とは、むろん去勢されて宮廷で雑用をこなす奴隷である。宦官が夫と夫婦の関係を結ぶというのはいささか奇異に思えるが、古くは漢の時代には対食関係なるものは存在し、明代においては一人身の宦官はかえってあざけりを受ける始末であつたといわれる。もちろんほとんどは性的関係を度外視したものである。中国の歴代王朝はいずれも宦官によって亡国の道を歩んだ。そして魏忠賢もまた、今まさに末期明王朝の癌になろうとしていたのである。

「このままでは皇太子様は廃されるやもしれませぬ」

ある日、魏忠賢は宦官の特徴ともいえる甲高い声で、客氏に語り始めた。

「たわむれを申すな、いかになんでもかようなことが」

客氏は一笑にふしたが、その顔色には、かすかに動揺の色があつ

た。

「いや先々のことはわかりませぬ。なにしろ皇太子様は無礼ではござるが愚鈍な御人。陛下がかの御人を後継と認めたとして、陛下の存命中に他の何人かが力を得れば、その地位必ずしも安泰とはいえますまい」

魏忠賢がいつになく真剣にかたるので、客氏もまたかすかに表情を変え、

「こなたなにをを申したいのじゃ、今日はちと様子がおかしいのではないか」

と疑念をていした。

「この魏忠賢、常々万一人に陥れられた時のため、こうして毒薬を所持しております」

と魏忠賢は懷から一服の薬をとりだした。

客氏の表情から笑みが消えた。宮廷はいわば権力闘争の修羅場である。今日権勢を誇った者でも、明日にはささいなことで失脚し命までも失うことも稀ではない。本人だけでなく一族にまで災いを及ぶこともあった。特に去勢した宦官は、常に人から影であざけりを受け、いつ何時身の破滅が待ちかまえていてもおかしくなかった。

「もし皇太子様が地位を追われた場合、禍は我らにも及びましょう。皇帝の身边を世話する役目を与えられた者等の中には、某の息のかかった者が数多おります」

宦官の多くは宮廷に奉仕する下僕として生涯を送る。ただし例外もいる。生来機転がきき、人にとりいる才があり、運にも恵まれた一握りの宦官のみは、きらびやかな衣装を身にまとい、まるで王侯並みの生活を送ることができるのである。こうしたいわば高級宦官は、身分の低い宦官をあごで使うことができる。宮廷、果ては皇帝周辺にも諜者として、自らの息のかかった下級宦官が数多いのが普通だった。

「もしかなた皇帝を殺めるつもりでおるのか」

「皇太子様に万一のことがあってからでは遅すぎます。陛下には

頭痛の持病がござれば、この毒薬を良薬と偽って口にさせることも不可能ではござりませぬ」

魏忠賢の怪しい鳥のような眼光が一層鋭くなった。

「ならぬ、それはならぬぞ、陛下を殺めるなどと、かような大それたことわらわは反対じゃ」

客氏のうるたえようは並大抵のものではなかった。だが魏忠賢は客氏をさらに脅し、あれいは権勢を得た後を語り甘言をもって籠絡し、ついには同意させることとなった。

魏忠賢はもと無頼の徒である。若い頃は専ら博打に明けくれ、ついには多額の借金をして生活に困窮し、自ら宦官になる道を選んだのである。無学文盲であるが人の心を読むすべにたけ、また博打をつちかつた勘から、将来を見通すこともできた。いわば魏忠賢は生涯で最大の賭けにでたわけである。

皇帝は哀れであつた。薬房を司る崔文昇という宦官のすすめる薬を服用した泰昌帝は、下痢を繰り返し、ついに危篤となつたのである。皇帝倒れるの報に宮廷は騒然となつた。崔文昇は多くの人々の非難をあびたが、魏忠賢が彼を擁護した。わずか数ヶ月の在位で崩御した三十九歳の皇帝を取り囲む延臣の中に、冷たくなつた皇帝の骸をみおろす魏忠賢の姿もあつた。ほどなく由校が明朝の十六代皇帝となる。天啓帝である。天啓帝の即位は同時に、魏忠賢専横の時代の始まりでもあつた。

天啓帝が即位し、皇帝と最も親しい魏忠賢と客氏が権勢の頂点の座に近づいたといつても、まだ目の上のこぶがあつた。かつて魏忠賢を皇帝に強く推薦した、いわば恩人ともいえる王安であつた。王安もまた宦官である。だが全ての宦官が悪であつたわけではない。かつて万暦帝が鄭貴妃を愛するあまり、その子を帝位につけ泰昌帝を廃さんとした際、筋目論をもちだし天啓帝をかばつた王安は硬骨の士であり、万暦帝の時代に傾いた財政を立て直さんとする、優れ

た志をもった政治家であつた。

だが皇帝をたぶらかし権勢を独占せんと欲す客氏と魏忠賢にとつて、王安のような清廉の士は邪魔者でしかない。王安は病弱であつた。天啓帝が即位した後、宦官としては最高位である司礼監への就任を要請されたが、病を理由に就任を一度は拒む。だが繰り返しすすめられ、ついに意を決した時、不幸はおこつた。皇帝の側近くの客氏が、王安にたくらみ事ありと讒言したのである。

皇帝は容易に信じなかつたが王安に怨恨のある劉朝という者が、客氏の言葉に嘘はないと、さらなる讒言をしたのである。王安は捕らえられ牢に入れられた。さしもの魏忠賢も恩人の王安を滅ぼすことにはためらいがあつたが、客氏は容赦しなかつた。獄中の王安は食を絶たれ日に日に痩せ細つていったが、幾度も無実を訴え簡単には死ななかつた。客氏は皇帝の気が変わることを恐れて、ついに強行手段にでた。刺客を獄に送り王安に疑念は解けたと偽り食事を与え、喜び口にした王安はほどなく絶命した。皇帝には王安は獄中で自殺したと報告されたのである。

もはや魏忠賢と客氏の勝る権力を持つ者は、皇帝を除き何人もいなくなつた。魏忠賢と客氏は皇帝を骨抜きにせんと画策した。

宮廷は一種のハーレムであり、皇帝の周囲には皇后の他の多くの側女がいる。皇帝の閨での事を司るのも宦官の重大な役目で、敬事房という特別な役職まで存在した。

明代、敬事房の役職にある宦官は皇帝が夕食の際、『緑頭牌』といわれる妃嬪の名がはいった札を食事とともに持参する。皇帝が夜伽を欲していれば、中の一枚を裏返しにして宦官をさがらせる。指名を受けた妃嬪は入念な入浴と化粧の後、宦官に全裸にされ凶器等を隠し持つてないか調べられる。そして羽毛の袋に包まれて皇帝の寢所に送りこまれるのである。

だが敬事房の宦官の役目は、まだ終わりではない。皇帝が妃嬪とたわむれる時間は限られているのである。刻限が来ると、

「是 時候了」

と叫び、皇帝が応じないと寢所につかつかと入りこみ、両者がいかなる状況にあると、妃嬪を再び袋につめ連行してしまう。むしろ絶対的な権力をもつはずの皇帝といえど逆らうことは許されない。宦官はそれほどまでの力を持っていたのである。天啓帝時代の敬事房には魏忠賢の息のかかった者が就任し、皇帝の性生活の監視者でもある魏忠賢は、いかにしたら皇帝を腑抜けにできるか、次第に悪知恵を働かすようになる。生来意思薄弱で、まだ年若い天啓帝の女に溺れる日々が始まった。

魏忠賢は絶対的の権力を手にし、自らの意に逆らう者を宮廷から遠ざける一方、天啓三年（一六二三）人の恐れる東廠のトップに立った。明王朝はある種の警察国家である。東廠は明王朝の特務機関で官吏に対し不穏な動きがないか常に監視していたばかりか、民間にも目を光らせており、反体制の動きに対し敏感に反応した。そして東廠のトップには必ず宦官が起用された。

ある時、北京の市井の居酒屋で男が酒を飲んでいた。と、不意に外で銅鑼の音がした。見ると魏忠賢が多くの警護の兵士に守られ、背後に料理人や俳優まで従えて街を闊歩していく。

「玉無し野郎がたいした威勢だな」

男がため息をつきながらいうと、一緒に飲んでいた者が、

「口を慎め、どこに御上の目が光っているかわからんぞ」

とかすかに顔色を変えて注意をうながした。

「馬鹿野郎、魏忠賢がなんだというんだ。小便ちびり野郎なんて怖くもなんともねえ」

宦官は性器を切除されてしばしの後は、排尿がコントロールできず失禁することがしばしばだったといわれる。

「魏忠賢がなんだというんだ、奴に俺の皮をはがせるとでもいうのか」

周囲の者が男をさらに止めようとしたが、酒が入っているせいで

聞く耳を持つとうとしない。そして事態は最悪の結果をむかえることとなる。

その夜遅く、男はやはり深酒をして寝こんでいた。不意に外で騒がしい物音がした。かすかに目を覚ますと声が聞こえてきた。

「御上より逮捕状がでておる。家主は速やかに出でよ」

男は逃走を図ろうとしたが時すでに遅かった。屋敷は東廠により完全に包囲されていたのである。男は連行され魏忠賢の前に引き出され、本当に体の皮をはがされてしまった。一緒に酒を飲んでいた男の仲間も連行され、一連の見せしめの儀式をふるえながら見とどけた後に釈放された。

魏忠賢のおごりはとどまることを知らず、ついには自らを聖人孔子に勝る存在といい、各地に彼を祭る祠まで建造させる始末だった。だが誰しもが皇帝気取りで上奏されてくる案件に目を通す（ただし彼は字が読めないので部下に読ませた）魏忠賢の横暴を黙って見ていたわけではなかった。特に東林党といわれる官僚集団と魏忠賢等宦官一派との対立は彼の死後、明朝の滅亡まで尾を引いていくことになる。

さらに應山出身で楊漣という者が立ち上がり、天啓四年（一六二四）六月、魏忠賢を二十四もの罪で皇帝に弾劾し、宮廷はしばし騒然となった。だが皇帝は愚かであった。一時は魏忠賢の処罰すら考えた天啓帝は、忠賢の哀訴におされて、ついには逆に楊漣を疑う始末であった。楊漣の再度の訴えも、完全武装した宦官数百人に取り囲まれた皇帝には届かなかった。魏忠賢の勝利である。楊漣はついに投獄された。

楊漣はかつて多くの貧民に施しを与えて救済した、優れた人となりをもった人物で、いよいよ連行されようとする際、数万の人々が沿道につめかけ無事を祈って泣いた。だが彼等の祈りもついにとどくことはなかった。賄賂の罪をでっちあげられた楊漣には、凄惨な

拷問と酷刑が待ち構えていたのである。

がんとして罪を認めようとしない楊漣は床に突き倒され、足や胴体に土嚢を積み上げられた。こうして身動きできなくなったところへ、耳には長く巨大な釘が差しこまれる。鉄槌で釘の頭を叩き続けられ、耳を貫いて逆の方角から釘の先端が飛び出し床に突きささる。楊漣はついに無念に眼光をいからせたまま絶命した。楊漣が絶命した後も土嚢は積み重ねられ、ついには腸が飛び出したとさえいわれている。楊漣の死後、彼の一族もまた根絶やしにされた。

かつて秦も漢も唐も宦官により滅亡の道を歩んだ。そして明もまた、同様に瀕死の状態にまで至ろうとしていたのである。魏忠賢専横の時代は、暗君天啓帝の死まで続くこととなる。

悪宦官と女狐（後書き）

最近、性描写が露骨すぎるので、そろそろ自重したいと思います（汗）

寧遠城の砲声（一）～明末の諸葛亮

後金は天命九年（一六二四）、都を東京から瀋陽（遼寧省）へ移していた。わずか六年ほどの間に五度にもわたり都を移したわけである。背景には土地に執着することなく移動をくりかえす草原の民の習性があったであろうことは、想像に難くない。

瀋陽はかつて遼の都城があった地でもあり、元の時代には瀋州路といわれた。当時は中路と東路の二区画に主に分類されており、中路はさらに公務を行う外朝と奴児哈赤の居住空間たる内廷に分岐されていた。まず後に大清門と名付けられた巨大な門をくぐると、目に付くのが崇政殿である。崇政殿は主に授封・任免等の儀式に用いられたと思われる。崇政殿から三層からなる鳳凰楼をぬけると、奴児哈赤の居住空間たる清寧宮である。ここでは諸王・諸臣の宴会なども頻繁に行われていたようである。

東路に目を移すと、大政殿といわれる、もう一つの主殿を中心にして、八王亭といわれる建造物が東西に四つずつ、合わせて八つ整然と並んでいる。大政殿は八角形からなる奇妙な形をした建造物で、政治・軍事の議政、さらには酒宴や八旗の閲兵に用いられた。八王亭とは、八旗の部隊がそれぞれの所属ごとに整列した場所なのである。

この瀋陽・故宮は二〇〇四年にはユネスコ世界遺産に登録され、奴児哈赤等の生きた時代を今日に伝える貴重な文化財である。瀋陽でドルゴンは順調に成長を続けていた。だが天命十一年（一六二六）、ドルゴンの身に突如不幸が襲う。父・奴児哈赤と母・烏拉納喇氏を一度に失うのである。

ドルゴンは十五歳になろうとしていた。当時としてはすでに立派な大人である。成長したドルゴンは背丈は同年代の青年達より高く、すらりとして痩せていた。切れ長の目に頬骨が高い。整った目鼻立

ちが、いかにも人に犀利な印象を与える。

すでに狩獵等にも幾度か参加し、その成長ぶりに奴児哈赤も目を見張った。そうしたある日、ドルゴンは不意に奴児哈赤に清寧宮に呼ばれた。

「今日はそなたに授けたいものがあつてのう」

奴児哈赤は高齡のためしわ深くなつたが、老いの中にも円熟さを感じさせる。奴児哈赤の前に巨大な木箱が置かれていた。ドルゴンがあげると、そこには一体の文殊菩薩像が納められていた。

「文殊菩薩は知恵の源泉じゃ。汝はいつまでもそれを手元に置き、功德にあずかれるようつとめよ」

文殊菩薩は髻を結び、瓔珞・腕釧などに身を飾り、右手で剣をふりかざし、左手に経典をしっかりと握つていた。だが奇妙なことが一つだけあつた。

「父上、何故菩薩に目がないのですごいますか」

「うむ、それはのう、かの菩薩の目はそなたの心にあるからじゃ」
ドルゴンはしばし怪訝な表情を浮かべた。

「そなたには、この先数多の苦難待ち構えておろつて、真の難題に直面したとき、そなたの心にある文殊菩薩の目が開き、正しい道へ導くであろう。わしがそなたに教えたいことはまだまだあるが、そうそう先行き長くない。わしが死しても文殊菩薩の加護があるかぎり、御身は安泰とこころえよ」

そこまでいうと、奴児哈赤は苦しうにせきをした。

「父上、どこかお体が悪うございますか」

「あんずることはない。そなたこそ生来病弱の身、体を愛えよ」

ドルゴンは生来頑健なほうではなかった。ときおり微熱に苦しむ持病のようなものがあつたのである。この時ドルゴンは厳格だった奴児哈赤に、父としての慈愛のようなものをかすかに感じた。時に奴児哈赤六十八歳。ほどなく明との国境に近い寧遠城に二十万もの大軍をもつて出撃していった。むろんドルゴンは奴児哈赤との今生の別れが来たことをしるよしもなかった。

さて晩年の奴児哈赤を苦しめた者に毛文竜という人物がいた。毛文竜は明の連兵遊撃という肩書きをもっているが、実のところ海賊に等しい存在である。杭州府（浙江省）の出自にして、幼少時より腕力にだけは異常に自信があつたといわれる。明の遼東司令官李成梁に従い女真族との戦いで武功をあげ、後に明の武科の試験に合格し累進した。サルフの合戦にも従軍したが、明が大敗した後は独自の水軍を編成した。

天命六年（一六二一）、毛文竜は巡撫の王化貞という者の命を受け、兵二百を四隻の船に分乗させ遼東半島を南下。渤海海峡を通過して、鴨緑江河口にまで達した。さらに夜陰に乗じて鴨緑江をさかのぼり、鎮江というところで敵の砦の内応者と通じて、合図とともに内・外から一斉に後金軍を挟撃した。毛文竜が火薬兵器までも巧みに使用したの比べ、後金側の不幸はおよそ海軍というものが皆無だったことである。結局、散々に打ち破られ鎮江城まで奪われることとなった。

その後も独自のゲリラ戦で奴児哈赤等、後金を苦しめた男毛文竜は、朝鮮半島の北端、厳密には平安道沿岸に浮かぶ皮島を根拠地とし、今もまだ奴児哈赤等の隙をうかがっていた。奴児哈赤にとり獅子身中の虫といえるだろう。

当時東シナ海のありようも激変しつつあつた。かつて北虜南倭といわれるように倭寇の跋扈した東シナ海は、今また新たに西欧諸国の進出の時代をむかえようとしていた。十七世紀はオランダが世界を支配した時代である。一六〇二年にはインドネシアに到達。オランダ東インド会社を設立し、さらに台湾にも進出、天命八年（一六二三）澎湖島を占領。翌年には安平にゼーランディア城を築いている。だが奴児哈赤やドルゴン等、女真の民が海の世界と直接対峙するのには、まだはるか時を置かねばならなかった。

陸地での戦闘に話を戻すと、明王朝は歴世のいかなる王朝よりも長城での防衛に重点を置いていた。遼西回廊は山海関から北上し遼西の広寧まで延々海沿いに続く交通路である。南から山海関（河北省）・前屯（遼寧省）・寧遠（遼寧省）・塔山（遼寧省）・松山（遼寧省）・錦州（遼寧省）と堅城が続き、強力な軍事ラインを形成している。

奴児哈赤は寧遠城と、城の背後に霧の中威容をもって立ちはだかる万里の長城を眼前にしていた。なにしろ万里の長城は二十一世紀の今日、宇宙飛行士が肉眼で観察できる地上で唯一の建造物なのである。思わず奴児哈赤の胸に迫ってくるものがあつた。

「かようなものが人間の手によって造られるとは、やはり中原の民は侮れぬ。果たして我が命ある間に長城をぬくことができるか否か」

奴児哈赤は自分に後残された時間を考えずにはいられなかつたと、不意に奴児哈赤は感じたことのない胸の苦しみに襲われた。喀血し、多くの将兵達が驚愕する中、落馬し意識を失つたのである。

奴児哈赤は三日三晩人事不詳となつたが、命には別状がなかつた。むろん後金の軍事活動は奴児哈赤の病により大きく停滞することとなつた。

一方、明の朝廷は奴児哈赤現るの報におおいに動揺していた。多くの者が国境の要衝山海関まで退いて守りに徹すべきと主張するのに対し、一人頑として寧遠城での決戦を主張して譲らない者がいた。袁崇煥という四十三歳の文人出身の將軍で、およそ文人出身らしく華奢な体格をしていた。将兵達は最初彼を侮つたが、多くの戦場で袁崇煥の策は不思議とよく当たり、やがて人は彼をして、古の三国時代の軍師諸葛孔明になぞられて、今孔明とよぶようになった。袁崇煥にはある必勝の策があつたのである。だが後金との決戦を前にし、袁崇煥でさえ予測できない事態が勃発した。

「將軍、新たに朝廷より派遣された高第なる者が、錦州・松山等の諸城をことごとく撤収し、山海関に退きました。いかがなさります

か」

「我等はここに孤立したというわけか、恐らく魏忠賢等、朝廷を牛耳っている宦官どもが裏で糸を引いているのであろう。なれどわしはこの城を守ると固く心に決めた。我が祖国を蹂躪しようとする者があるに、ここを退いて他に逃げていく地もあるまい」

袁崇煥の言葉は、深く将兵達の心をとらえた。

「恐れながら、我等一同、皆將軍とともに参ります。必ずやここを死に場所といたしましょうぞ」

一人がいうと、他の者も同意する。袁崇煥は軽く微笑みを浮かべ、「よう申した、ならば我等一同、ここで心を一つにし必ずや敵に矢報いようぞ」

と万感の思いでいうと、血判状をつくり、袁崇煥始め將軍達の多くが指をちぎり決意を新たにした。

奴児哈赤は病の身に鞭打って城に迫っていた。寧遠城はほぼ方形に近い形をしており、城壁の高さ約十メートル、城壁の厚さは基底で約九メートル、上部で約八メートルあった。ここを越えれば国境の山海関があり、その先に北京がある。だが奴児哈赤は、この戦いが生涯最後の戦いになることを、むろん知らずにいた。

寧遠城の砲声（二）―奴児哈赤の不覚

袁崇煥は東莞（広東省）の出身である。三十五歳にして進士に及第し、まずまず順風満帆な人生の船出であつたといえるだろう。だが袁崇煥の不思議なところは、すでに福建の地方官であつた頃から文官の身でありながら軍事に深く傾倒し、好んで国防を語つたことであつた。変わり者である。胆力は無論、尋常一様ではない。いかな窮地にあつてもどこかひょうひょうとしたところがあり、それがまた配下をして、彼を深く信頼させることとなつた。

寧遠に赴任した袁崇煥は、寧遠城の城郭をさらに堅牢なものにすると同時に、周辺の開発にも着手した。周辺の人口は飛躍的に増え、五万戸をようするまでになつたといわれる。また、寧遠より東はモンゴル人の割拠する地であつたが、袁崇煥は大凌河付近でモンゴル軍を撃退し、戦上手ぶりをいかんなく発揮した。

天命十一年（一六二六）一月、袁崇煥は寧遠城より噂に聞く八旗の威容を間のあたりにし、思わず息を飲んだ。後金軍約二十万、対する明軍はおよそ四万ほどである。

中国本土と東北地方を隔てる長城地帯は、ほとんどが山岳部で、平地部は海岸線に沿つてわずかに存在するにすぎない。東北から本土に入るには沿岸部を縦断するか、西に迂回して山西省に入るしかない。この地形を見て袁崇煥は、寧遠城に後金軍を釘付けとし、寧遠海上の覺華島の海軍とともに、海陸から敵を攻囲する作戦を皇帝に進言した。

時に一月二十四日、後金軍八旗の精兵二十万は、まるで巨大津波が移動するかのように、一斉に寧遠城に迫つた。八男ホンタイジをはじめ八旗の主達は、奴児哈赤の体調を懸念して攻撃を見合わせるよう進言したが、奴児哈赤は頑なに聞かなかつた。

「押し寄せてまいります」

揮下の将が告げると、城の奥深くの椅子に悠然と腰かけた袁崇煥は、

「よし、各隊各将はかねてからの指示どおり動け、皆、今日ここで死ぬことこそ国に対する忠義と思え」

と落ち着いた声でいった。

この合戦に先立ち、袁崇煥は城の中で特に防備が薄い箇所は補強をすでに完了し、さらに味方の中で敵に内通する恐れのある者は斬り捨てていた。さらに圧倒的な後金の騎兵に対し、袁崇煥は火器をもって待ちかまえていた。

中国における火器の歴史は古く、宋代にはすでに使用されていたといわれる。火竜槍といわれる青銅でできた筒に大砲をつめた兵器さらには火縄銃、そして仏郎機砲まで使用され、後金の主力騎兵を足止めさせることに成功する。袁崇煥の優れていた点は、合戦の予行演習において火器の使用に適正のある者を選抜し、訓練に訓練を重ねさせ、彼らの多くが扱いに習熟していたことだった。

後金側では第一陣をホンタイジがつとめたが、あえなく撤退。第二陣はアミンが率いたが、これもはかばかしい戦果がえられないで撤退した。

「よし敵がひるんだぞ、攻夷砲を用意せよ」

袁崇煥の指示はただちに城の隅々までいきわたり、鈍い音とともに後金兵が密集する地点に、かつてない威力をもった大砲が着弾する。それは袁崇煥が明の朝廷の多くの者の反対を押し切ってまで戦場に持ち込んだ、攻夷砲と名づけられたポルトガル製の大砲だった。攻夷砲は長さ約三メートル、口径十センチ、重さ約三トン。前装砲で砲身の壁が厚く重い砲弾を用いるのに適していた。

その破壊力たるや中国の火器の比ではなく、たちまちのうちに後金兵は阿鼻叫喚の地獄を味わうこととなる。混乱が八旗の各部隊に伝播するまで時はかからなかった。結局この日、奴児哈赤は予想外の死者を出して兵を退くに至ったのである。

「馬鹿者共が、我ら二十万の大軍をもつて城一つ落とせぬとあつては、敵のあざけりを受けるは必定」

軍議の席上、奴児哈赤は病のせいか平素より気短かになっていた。「恐れながら、父上がかような身の上なれば、我ら安堵して戦に望むことかないません。やはりここは一旦兵を退くが肝要かと」

不安げに発言したのは、ドルゴンより七つ年上で母を同じくする兄、阿济格だった。阿济格は八旗のうち正黄旗の旗主でもあった。

「それは言い訳であろう。汝等が臆しておるだけのこと」

いまいまして机を叩いた奴児哈赤であつたが、次の瞬間には興奮のあまり、再び苦しそうにせきをした。動悸の高鳴りと同時にめまいがし、不意に心配気に見守る諸王達の顔が遠い存在に思えた。

「父上、無理をなさつてはいけませぬ」

ホンタイジが氣遣つたが、奴児哈赤は相変わらず空ろな眼光をしながらまだつた。奴児哈赤の脳裏をふと遼東の山河がよぎつた。奇妙なほど淡い風景だった。やがて、まだ幼いドルゴンと狩猟にでかけ、ドルゴンが初めて獲物を仕留めた日の光景が、ありありと甦つた。

「いや、引き返すわけにはいかぬ。わしは漢人共の捕虜から聞かされたことがある。中原の地の豊かさ、そこは我等の生きる地とは別の天地。我等は貧しい。わしは生ある間に女真の民に知らしめたいのじゃ、冬は凍てつく大地に震え、例え雪がとけても、野の獣とともに生きる道ではなく、豊かに生きる術を、故に我等引き返すわけにはいかぬ」

奴児哈赤の静かだが確かな闘志は、諸王達にも伝わり、それぞれが決戦を覚悟せずにはいられなかった。

翌未明、後金軍による覚悟の城攻めは開始された。奴児哈赤は作戦を変更し、比較的防備が手薄な西側の城壁に兵力を集中させる。むろん城壁からは弓矢・鉄砲が雨あられと降りそそぐ。諸王達が驚愕したのは、奴児哈赤自らが敵の飛び道具の射程距離まで馬をす

め、兵士達を叱咤激励し始めたことだった。

攻撃の第一波が挫かれたと見るや、奴児哈赤はただちに新たな部隊を投入する。壮絶な白兵戦が一時も続き続いた。後金の八旗の部隊は、味方が倒れても倒れても屍を踏み越えて城壁に取りつこうとする。やがて夜明けが来て、陽の光により八旗の部隊の鎧の色がはっきりと識別できるほどになっても、なお波状攻撃は続けた。

さしも城壁を死守してきた守備兵達にも、疲労の色が濃くなってきた。そしてついに、地面を掘っていた後金兵の一部が城壁に通じる突破口を開いた。後金兵達が怒涛のようになだれこんでくる。

「恐れながら、敵が押し寄せてまいります。お逃げくださりませ」
一人の背に矢の刺さった血まみれの兵士が、片膝をつき、椅子に腰かけた袁崇煥に逃亡を進めた。

その時、袁崇煥は立ち上がる。抜刀すると、自ら殺到する後金兵の前に立ちふさがった。指揮官の勇に一時おおいに動揺した守備兵達も立ちなおり、激闘し、さらには城壁の穴を埋め立てる作業が決死の覚悟で行われた。この間、袁崇煥は左臂を負傷し城内に担ぎ込まれるも、闘志はいささかも衰えることなく、軍服をちぎって傷口をふさぎ、刀を手にし再び後金兵の前に勇士を現わした。

激闘すること数時間、ついに後金兵達はしりぞけられ、城壁の穴も埋められた。なおも食いさがらうとする後金の部隊であったが、袁崇煥は城壁の前に油をまき、そこに火をはなち、多くの兵士達が炎に身を焦がすことになる。

「己、わしともあろう者が戦場で不覺をとるとは」

奴児哈赤は齒軋りした。二十五歳で自立して以来、生涯初めて味わう屈辱であった。突如、奴児哈赤はまるで絶望した者のように、敵の砦の方角にむかつて単騎で突撃を開始する。剣をぬいた奴児哈赤の前に、まるで狙いすましたように攻夷砲が着弾する。次の瞬間、

砂塵がおこった。もうもうと立ちのぼる砂煙の後に、地に伏した奴児哈赤の無残な姿があった。

「大汗！」

「大汗、しっかりなさいませ！」

だが人事不詳の奴児哈赤の耳に、兵士達の声は届かないも同然だった。重体の奴児哈赤は、ただちに陣の奥深くに担ぎこまれた。

その夜、後金の部隊は夜陰にまぎれて肅々と撤兵を開始した。翌明け方、敵の姿が消えたことに、寧遠城では狂ったように勝利の歓声が響いた。一方、負傷した奴児哈赤の命脈が尽きる時は、今や刻一刻と迫っていた。

奴児哈赤の最期

八月、後金軍は瀋陽への帰路を急いでいた。八旗の部隊の先頭には奴児哈赤ではなく、八男ホンタイジの姿があった。軍勢の行進は鈍く、どの兵士も表情がどこか重苦しい、ある種の悲壮感にうちひしがれた様子がかがわれた。単に長対陣と敗戦からくる疲労だけではない何事かが、全軍を支配していたのである。軍勢を率いるホンタイジは、ある悲壮な覚悟を胸に、瀋陽への帰路をいそいでいた……。

寧遠での敗戦で重症を負った奴児哈赤は、その後も病状いつこうにはかばかしくなく、清河の温泉での治療も空しく、瀋陽から約二十キロの場所で、ついに危篤の状況となった。死を覚悟した奴児哈赤は、自らの枕元に諸王達を参集させた。

「よいからおまえ達よく聞くがよい。これがわしの最後の言葉じゃ。我亡き後、汗の位を継ぐ者はホンタイジとする」

諸王達の間から一斉に驚きの声があがり、座の少し後ろに控えていたホンタイジに視線が集まった。

「恐れながら父上、かような不吉なことを申されるな、このホンタイジにそのような重責はまっとうできません。どうか今一度元気な姿で……」

とホンタイジは、儀礼的な意味も含めて一度は辞退してみせた。

「気休めはいらぬ。わしの命運はすでに尽きたも同然。わしは十六にして六人の家来、五人の下僕の女、二匹の馬、四頭の牛を父より与えられ、今日まで諸所を転戦し、ついには女真を統一するに至った。なれど衰えたりとはいえ、明は我らを滅ぼす機を虎視眈々とうかがっており、これを討滅することかなわすは無念の至り。例え我死すとも魂は死なず、虎となりて北京を陥れるであろう。ホンタイジよ汝は武勇ではわしに劣るであろう、なれど政治をつかさどれば

わしより優れておる。他の者も心してホンタイジに仕えよ。夢々誤ることなきよう。それがわしの最後の願い」

「我等一同、慎みて新たなる汗に忠誠を誓う所存」

といったのはダイシャンだった。同時に諸王達が一斉に片膝をつき、ホンタイジに忠誠を誓った。

「それでよい、わしはホンタイジにおりいって話しがある。他の者は下がるがよい」

諸王達は部屋を後にし、奴児哈赤とホンタイジだけが残った。しばし沈黙があった。

「ホンタイジよ汝は漢人達の国の歴史において、隋の楊堅のことを存じておるか」

隋の楊堅は、数百年にわたって動乱の時代が続いた中国を統一し、隋の王朝を築いた英傑である。だが死にのぞんで、後に中国史に暗君として名高い楊広（煬帝）を後継者とし将来を託すも、自らが寵愛する宣華夫人が、楊広によりかどわかされたことを知り、悶々のうちに世を去った。

「存じておるまする。なれどそれがし父上が何を申したいのかわかりませぬ」

その時ホンタイジは、自らを見つめる奴児哈赤の目に、哀れみとも侮蔑ともとれる色をかすかに見て顔色を変えた。

「わしの目は節穴ではないぞ。そちと阿巳亥のことよ」

ホンタイジの受けた衝撃ははかりしれず、瞬時目眩がし、立っていることさえおぼつかない様子となった。ホンタイジは奴児哈赤の留守を見計らい、ドルゴンの生母阿巳亥と密かに会うことがあったのである。

「本来なら、汝のような不孝な子は斬って捨てていたところだ。なれどわしが見たところ、後金の将来を託せるのは汝しかおらん。他の誰が国を継いだとて、ゆくゆく後金は瓦解し、わしの生涯も水の泡となるう。わしが汝を斬って捨てるかわりに、汝があの子を斬れ。

そなたならできるはずじゃ、私情に流されることなく、国の将来を危うくする禍根を絶つことが」

しばし二人の間に沈黙があつた。ホンタイジは胸に去来するものがあまりに大きく、言葉すら発することができなかつたのである。やがて、

「ならば、三人の子等をいかがいたしまするか」

とようやく言葉を発した。

「生かせよ、全てはわしが命じたこと。そなたに罪はない。特にドルゴンはゆくゆく役に立つ。後金の命運を左右するやもしれぬ」

不意にホンタイジは一、二歩後ろに下がり、その場に膝を突いた。「父上、どうか拙者の不孝をお許しくださりませ。このホンタイジ生涯の心得違いを致しておりました。父上の志は必ずや拙者が受け継いでご覧にいたしまする」

ホンタイジは唇を噛みしめながら、叫びともとれる声を発した。

「うむ、それでよい。我が子ホンダイジよ、それでこそ我が志を継ぐ者よ」

奴児哈赤はかすかに笑みさえ浮かべた。

その夜嵐になった。奴児哈赤はこんこんと眠りについてしたが、雷鳴が天を裂いた瞬間、突如として目を見開き寢床から起きあがつた。刀をとると一閃、見守る諸王達が驚きの色をうかべると、その鋭い眼光がホンタイジを凝視し、

「後は頼んだぞ……」

と一言いい、自らの喉元に刃を押しあてた。鮮血が飛び散るとともに、諸王達は一斉に泣き崩れたが、ホンタイジは冷厳な眼差しを浮かべたままだつた。すでにホンタイジの心は、一族を背負う悲痛ともとれる覚悟で貫かれていたのである。時に奴児哈赤は六十八歳だった。後金に新たな時が訪れようとしていた。

別離の時

烏拉納喇氏こと阿巳亥は、数名の侍女とともに銀の雫が降りしきる深い森の奥へと続く道を歩んでいた。冬の森は死の世界である。

森羅万象すべてが雪の中息を潜め、生ある者の気配一つしない。奇妙なことに、雪の野に月に照らされた一筋の道だけが鮮明に浮き上がり、山頂へと阿巳亥と松明を手にした侍女達を誘っていた。やがて月が無明と変わる頃、

「おまえ達は王宮に戻るがよい」

と、阿巳亥は侍女達に告げた。

「かようなところに大妃様一人を置いて去ることはできません。もし万一のことあらば、私達自身も大汗様より咎めを受けることになります」

「わらわのことなら心配いらぬ。明日の夜明け前、大汗が王宮に戻る頃には、わらわもまた帰城しておるであろう」

阿巳亥は嫌がる侍女達を無理やり下がらせた。やがて岩に腰をおろして、しばし川のせせらぎに耳をかたむけていると、馬のいななき声がした。騎乗していたのは、すでに壮年に達していると思われる、頑健な体躯をした武者だった。

「そなたを待っていた」

そついうと阿巳亥は軽く微笑み、武者が馬上差し出す手に導かれるように、雪原の中に消えた。

瀋陽・故宮の清寧宮で、烏拉納喇氏は部屋の外で侍女達が騒ぐ音で目を覚ました。

「大妃様に申し上げます」

と膝をついたのは、十五歳になったウランだった。ウランはこの年から宮廷に仕える身となり、数年前他界した奴児哈赤の正夫人葉赫納喇氏（エホナラ氏）に代わって大妃の地位についた烏拉納喇氏

の身辺の世話などをしていた。

「寧遠に出兵した二十万の軍勢が帰還した模様です……」

ウランは不意に言葉を濁した。

「なんじゃ、はつきり申せ」

「それがどうも軍勢の様子がただならぬとのこと、軍勢を率いているの大汗ではなく、ホンタイジ様であるとか」

「なんと寧遠では手痛い敗北を察したと聞いたが、よもや大汗の身に大事でもあったというか」

烏拉納喇氏がかすかに動揺していると、他の侍女がその場に膝をつき、

「申し上げます。大妃様と二人の子等は、速やかに城を出て軍勢を出迎えよとのホンタイジ様の命にござります」

状況がよく把握できないまま、烏拉納喇氏とドルゴン、そして弟の多鐸は城の外に八旗の部隊を出迎えた。他に城の女子供達は全て軍勢を出迎えることとなった。

この時ホンタイジは正白旗の部隊を所有していた。夜明け前の静寂の中、鮮やかな純白の部隊が整然と隊列を組み行進し、部隊の最後尾には騎乗して身辺の様子をうかがうホンタイジの姿もあった。烏拉納喇氏がホンタイジの姿に気づいた時だった、突如として正白旗の護衛（各旗王の親衛隊）の兵士達が騎馬で近づき、一斉に下馬して烏拉納喇氏の前に片膝をついた。

烏拉納喇氏が何事かと驚きの色を浮かべると、ホンタイジの最も側近くの護衛の臣が、

「皆もよく聞くがよい、これより亡き大汗の命を伝える」

と大声で衝撃的な言葉を発した。奴児哈赤すでに死す、この一事だけでも女達を動揺させるのに十分だった。だが次に伝えられた言葉は、烏拉納喇氏にとってさらに驚くべきものだった。

「大妃様におかれては、大汗とともに一国を支える重責を担いながら、常日頃より放埒にして、己が身分をわきまえぬ言動多々あり。」

よつてその身分を剥奪し、身柄を二人の子等と幽閉するようにとの亡き大汗の命である」

烏拉納喇氏は、しばし魂が足もとからぬけていくかのような錯覚におそわれた。

「己、母上に一体どのような非があつたというのだ」

激高したのはドルゴンだった。取り囲む護衛の兵士達から、かすかに殺気が伝わってきて、ドルゴンは思わず剣をぬく。むろんまだ戦場で人を斬つたこともないドルゴンは、剣を持つ手がかすかに震えてもいた。もともと気の弱い多鐸にいたつては、ぶるぶると震え目に涙をためていた。

「全ては亡き大汗の命にござる」

「父上が死んだだと、でたらめをいうな。ましてや何故父上が母上にかような仕打ちをせねばならぬのだ」

「おやめなさい、ドルゴン」

烏拉納喇氏がドルゴンを制止した。次の瞬間、馬上じつと一部始終を見守るホンタイジと目があつた。むろん烏拉納喇氏は事のいきさつを全て知るよしもなかった。ただ状況から察すると、ホンタイジが奴児哈赤から後継者として指名されたことは、ほぼ間違いない。た。もしそうだとすると、自分との今までの関係は、全て闇に葬られなければならぬ醜聞である。

烏拉納喇氏は、しばし恨みに満ちた目をホンタイジに向けた。

『わらわを捨て、新たな大汗の地位を固める腹か』

叫びが届くなら、烏拉納喇氏はそう叫んでいたかもしれない。ホンタイジもまた何事かを察してか、烏拉納喇氏の鋭い眼光をゆつくりと避けると、二度と振りかえろうとはしなかった。

「恐れながら、これは一体何事、いかなる理由があつて母者は身分を奪われねばならぬのでござるか！」

とホンタイジの馬の前に片膝をつき、必死に食い下がったのは、

ドルゴンと母を同じくする兄阿濟格だった。

「全ては亡き大汗の命じゃ」

ホンタイジは阿濟格と目をあわせることなく短くいった。

「それだけでは納得いきませぬ」

蒼白の形相をし、なおも食い下がる阿濟格にホンタイジは、

「黙れい、汝は今後、汝の母に仕えるか、それともこのホンタイジに仕えるか」

と最後通牒を下した。ホンタイジと阿濟格では兄弟とはいえ、年が十三もはなれている。今まで幾度かじかに接したことがあったが、それはあくまで兄貴分としての接しかたであり、今日ほど厳格なホンタイジを見たことがなかった。例え弟であろうと今日からは臣下として扱うという、三十五歳のホンタイジの並々ならぬ覚悟がそこにかがわれた。今まさにホンタイジは一人の武者から、一国の浮沈を担う者へと変貌しようとしていたのである。

ホンタイジの決意を固いことがわかれると阿濟格は、無念のあまり地に額をこすりつけ、砂を血がでるほど握りしめ、そして嗚咽した。ホンタイジと周辺を固める護衛は、ゆっくりとその場を後にする。

結局烏拉納喇氏とドルゴン、多鐸は石牢に幽閉され、さらに烏拉納喇氏の侍女達もことごとく別の場所に幽閉された。彼女等のなかに、あのウランもいた。

「あらたまった用事とは一体なんのことだ我が子豪格よ」

奴児哈赤にかわって清寧宮の主となったホンタイジのもとを、長男の豪格がたずねてきた。豪格はこの年十八歳で、すでに？白旗の旗主でもある。頑健な肉体をしており、戦場でも勇猛さを発揮し、ホンタイジもまたひとかたならぬ期待をかけていた。

「実は一つお願いしたとき儀があります」

豪格の口は重かった。

「どうしたのじゃ、はっきりと申せ」

椅子に腰かけたホンタイジは、息子のただならぬ様子をいぶかしんだ。

「実は助けていたきたい女子が一人おりまする」

やや口ごもってはいるが、豪格の表情は真剣だった。豪格が助きたい女とはウランのことだった。その名がでたときホンタイジはいよいよ不思議なものでも見るような目で豪格をみつめ、やがて、

「詳しく話を聞こう」

と関心をしめした。

去年のことだった。豪格は山野に狩獵にでかけ、つつい森の奥深くへと分け入りすぎ道に迷ってしまった。

「困ったことになったものだ、このままでは今日は野宿することになりかねん」

弓を片手にした豪格が困惑していると、どこからともなく笛の音がする。

「かような山奥で笛の音とはめずらしい……」

好奇心にかられた豪格は、道に迷っていることも忘れ、笛の音のする方角に馬足をむけた。気がつくあたりはまったくの闇である。やがて豪格は川の流れの前で笛を口にする一人の夫人を見た。夫人は鮮やかな桃色の旗袍に身をつつんでいた。

「すまぬ道に迷った者だ、城を通じる道を存ぜぬか」

豪格が声をかけると、女は背をむけたままで、

「私をお忘れになりましたか？ 貴方はホンタイジ様の長子で豪格様でありましょう」

と軽く笑ってみせた。

「何故私の名を知っている」

と、いぶかしんだ豪格であつた、振り向いた女の顔に見覚えがあった。

「もしやそなたはウランか」

豪格とウランは三年ほどの間、顔を合わせたことがなかったので

ある。

「いつかは私の命を救っていただきましたな。あのおりの恩はいまだ忘れておりません。城へ通じる道は私が知っております。まいりましょう」

ウランは十四歳、まだ幼女のあどけなさと、かすかな大人の色気が混同して、妖しい雰囲気をもしだしてる。それからどこを彷徨っていたのかはつきり記憶にない。気がつくと豪格はウランの膝の上で眠っていた。豪格はこのとき初めて恋というものを感じた。むろん一夜かぎりのことである。

「恋か……うらやましいことよのう」

話をひととおり聞き終わるとホンタイジは、かすかに憂いに満ちた表情をうかべた。

「父上、なんと仰せられた？」

豪格は今ひとつホンタイジの言葉の意味が理解できず、思わず聞き返した。

「いや、なに、それで汝は女の命を助けると申すのだな」

「できれば嫁にむかえとうございます」

豪格がはつきりいうと、ホンタイジはかすかに笑みをうかべ、

「よかるう、たかが侍女一人ぐらい生かしておいたとて国が傾くわけではあるまい。その女の面倒は汝が責任をもて」

「ありがたきお言葉！」

豪格は平伏していった。こうして両者は夫婦となった。後年この両者には不幸な別れがおとずれることになるが、むろん豪格は、まだ知るよしもないのである。

「母上様、いったいこれからどうなるのでございますか」

と身動きも不自由な石牢の中で、烏拉納喇氏に問いただしたのは多鐸だった。すでに牢に入れられてから三日、外の情報は一つも伝わってこない。むろんまだ十三歳の多鐸に、政とは一体なんである

か、考えも及ばない。

ドルゴンは最初ショックで動転していたが、生来の聡明さから、己が今おかれている状況を、必死に把握しようとしてつとめるようになった。むろん、十五歳のドルゴンの到底理解の及ばぬことであつた。ただ己の母が父の愛を失つたか、もしくは愛を失うような何事かの過ちをおかしたことだけは、おぼろげながら理解できた。いずれにせよ、今までの人生を父母の愛のもと順風に歩んできたドルゴンとつて、突きつけられたあまりに過酷な現実だつた。

すでにドルゴンの生殺与奪の全ての権限は、二十歳年上の兄ホンタイジに握られている。そしてこの時から実に長きにわたり、ドルゴンの命運の全てはホンタイジに委ねられることとなる。ドルゴンが全てを理解するには、まだあまりにホンタイジという人物を知らなすぎた。

烏拉納喇氏は、むろん己が犯した過ちを語つて聞かせるわけにはいかない。語つたとて、幼い子等に全てを理解できるか否か……。いやドルゴンなら今は理解できなくても、ゆくゆく理解できるかもしれない。だが、もしせめて子等だけでもここを無事脱出できたとして、ゆくゆく奴児哈赤にかわつて大汗の位につくであろうホンタイジという男を、子等がどう思うであろうか。ホンタイジとて、二人の子等に対し容赦はしないであろう。しばし烏拉納喇氏は、ホンタイジの鋭い目が今まさにそこにあるかのような錯覚を覚えた。そして二人から質問攻めにされるたび、返答に窮し困惑するばかりだつた。

「誰じゃ」

かすかに木漏れ日がさす石牢の中で、烏拉納喇氏は外の世界に数人の人の気配を敏感に察して声をあげた。扉がゆっくりと開く。騎乗した三人の武者が烏拉納喇氏を見下ろしていた。武者達は一斉に下馬して片膝をつく。

「今日は我ら、我らが主の意思を大妃様に伝えるため、はるばるま

かりこしたる次第。単刀直入に申し上げる」

ホンタイジの使いの者らしい武者は、なにかを振り払おうとするかのように、はっきりとした声でいった。烏拉納喇氏は思わず息を飲んだ。

「我らの用向きは、今日我らが主より大妃様に死を賜ることにござります」

この時、烏拉納喇氏は胸中奥深くにあるなにかが氷解していくかのような感覚におそわれ、子等の前では決して見せまいとした涙が、知らぬうちに頬をつたうこととなった。

「さりながら、二人の御子息におかれましては、一命を救われるようにとの達しにござれば」

「なんと、おまえ達母君を捨てて、我等にだけ生きよと申すか」

「待ちなさいドルゴン」

ようやく涙をふいた烏拉納喇氏が興奮したドルゴンを制止し、しばし思いつめたように沈黙した。

「いいでしょう、連れていきなさい」

と無念を押し殺しながらも、烏拉納喇氏は決心した。

「なんと仰せか母者、母者が死ぬなら自分もここで死にまする」

「なりませんドルゴン、わらわの命運がここで尽きたとて、そなたが生きている限り、わらわは死なぬ。わらわが生きたかったぶんだけ、そなたらに生きてほしいのじゃ」

「ならば母上、これにてお別れにござるか……」

ドルゴンはかすかに唇を噛みながらいった。

「よいかドルゴン、多鐸は気の弱い子じゃ、面倒をしつかり頼むぞ」
烏拉納喇氏はかたわらの多鐸の方角にかすかに目をやった。

「母上、もう会えぬのでございまするか」

多鐸は短くいうと、かるうじて涙をこらえた。

やがて二人はホンタイジの使者に伴われて、薄霧の中に消えてい

った。馬のひづめの音が完全に途絶えた時、烏拉納喇氏は今一度声を殺して嗚咽した。ホンタイジの使いの者のうち一人が、まだ片膝をついたままだった。

「こなたはわらわの命を奪うため、ここに残ったか」

武者は無言のうちに立ち上がり剣をぬいた。そして正座した烏拉納喇氏の頭上高く構えをとる。烏拉納喇氏が覚悟を決めた次の瞬間思いもかけぬことがおこった。突如として武者は烏拉納喇氏に背を向け、剣を逆さに持ち直し、先端で牢の壁を叩き始めたのである。二度、三度繰り返した時鈍い音がして、なんとそこに抜け穴が出現した。

「我が主の密命にござれば、大妃様が、もし命がほしいと申されるなら、この穴より逃げのびさせよと仰せでござった。なれど拒まれるなら最早せんなきこと」

武者の眼光が瞬時鋭く光った。

「ほほほ、随分と見くびられたものよのう。こなたがもしわらの立場ならなんとする。ここから逃げ延びて、山野を鳥や獣のごとく生きるを潔しとするというか」

「それは……」

「遠慮はいらぬ、夢々わらわが見苦しきふるまいをしたなどと、こなた等の主に伝えてはならぬぞ」

「後悔なさらぬな」

武者はいま一度念を押すと、再び刀をかまえた。鮮血が武者の鬼の形相を朱に染めたのは、次の瞬間のことだった。

その夜、ホンタイジは寢所で女のすすり泣く声で目を覚ます。
「誰じゃ」

ホンタイジは叫んだが、声だけで姿が見えない。その時であった、壁にかけてあった掛け軸に目をやったホンタイジは思わず仰天した。なんと泣いていたのは、掛け軸に描かれている水浴びする天女だったのである。

不意に何者かの気配がした。ホンタイジは床に己以外の何者かの影があることに、さらに驚愕した。見覚えのある影だった。

「大妃、我を恨むか、そなたに思いを寄せたはわしの不覚、そなたに死を賜りしは国のため、汝の子等のことなら案じるに及ばん」

ホンタイジはかすかに震えた声で叫んだ。

「ほほほ、なれど汝はわから全てのものを奪った。いずれ後悔する時がくるというもの」

ホンタイジは思わず剣を振るったが、悪霊はすでに消えていた。これが両者にとり今生の別れとなった。

烏拉納喇氏こと阿巳亥、すなわち孝烈武皇后は、わずか三十八歳にして散った。ドルゴンは父奴児哈赤に続き、母までも失い、弱冠十五にして孤児として取り残されることとなったのである。

新たなる大汗の御世

瀋陽・故宮の鳳凰楼、ここに現在も清朝歴代皇帝の肖像画が飾られている。むろん後に太宗といわれることになるホンタイジの肖像画も含まれている。太宗・ホンタイジは奇妙なほど瞳が小さく、そして色白だった。そして全体としてふつくらとした顔立ちをしていた。ちょうど隣に飾られた父・奴児哈赤の肖像画から、いかにも叩き上げの軍人を思わせる風格、ある種の頑健さ、意思の強さが伝わってくるのと比べ、どこか育ちの良さが感じられる。

かといってホンタイジはむろん、ただの凡庸な二代目ではない。その才は軍事より内政面に発揮され、一個の統一体となった大金国をまとめあげる、守勢の時代の難しさを体現する存在だったといつてよい。つぶらな瞳の奥に一匹の虎が眠っていることを、まだ多くの者は知らずにいる。

死を免れたドルゴンは、改めてホンタイジという人物とじかに接することとなった。ホンタイジは椅子に深く腰かけ、上段からドルゴンを見下ろしていた。

「母上は気の毒なことをした、なにぶん亡き大汗の命じゃ、何人たりとも異をとねえることかなわぬのでなあ」

とホンタイジは最初にドルゴンの胸中を察した。

「何故でござりますか、何故母上は命まで奪われねばならなかったのでござりますか」

ドルゴンの言葉に無念さがにじんでいる。ホンタイジの表情がかすかに曇った。

「ドルゴンよ汝はすでに妻を娶っておるそうじゃな。そなたは妻をどう思っておる」

ドルゴンはすでに十三にして妻を娶っている。一般に女真族は早婚で決して珍しいことではない。相手はモンゴル・ホルジン部の出

自で、年はドルゴンとさして変わらなかったといわれる。なぜモンゴルかというと、やはりかつてチンギス・ハンの時代大帝国を築いたことと関連がある。この時代すでにかつての勢いを失ったとはいえ、騎馬民族の世界においてモンゴル族は、一段高い貴種と見られていたのである。

「愛おしいとおもいまする」

とドルゴンはしばし考えた後、短くいった。むろんドルゴンもまだ若すぎる。妻を娶ったといっても実感が薄く、人並みの容姿ではあるが、無口でやや才気にかける若妻に、燃えるような恋慕の情をもったわけでもない。他に答えがなかったのもせんなきことであつた。ホンタイジはそれを見抜いていた。

「若いそなたにはわからぬか。亡き大汗はの己が身が滅びるとともに、大妃の命をも望んだのじゃ、死してもともにありたいと申してな、己が亡き後、他の何人の手にも委ねたくないと仰せられてのう。それが亡き大汗の思いじゃ。ただいきがかり上、わしは汝と汝の弟をも幽閉したが、汝等には生きてほしいとも仰せであつたわい」

そこまで聞くとドルゴンは、

「不条理にござりまする。世にかような理不尽なことがありますよ
うか」

と無念を押し殺し、かろうじて声をだした。ホンタイジもまた、その光景を目にしながら胸をしめつけられるような感覚におそわれていた。

「いずれにせよ父は、こなたがゆくゆく国の命運を左右するやもしれぬと仰せであつた。こなたは生きよ、そしてやがてはわしの片腕となれ。母のことは忘れるのじゃよいな」

そこまでいうとホンタイジは足早に身を翻して、場を立ちさつてしまった。残されたドルゴンは、息を殺しかすかに嗚咽せずにはいられなかった……。

やがて奴児哈赤の葬儀が、チベット仏教の儀礼にのっとり肅々とおこなわれた。そしてホンタイジの即位の大典、むろんダイシャン等ホンタイジの年上の兄達もそろってホンタイジの前に膝をつく。もちろんドルゴンの姿もあった。年号も翌年より天命から天聰に改められることと決まった。だがドルゴンの心の中では母との別れ以来、全ての時間が止まったままだった。全ての事象が、まるで夢の中にでもいるかのように通りすぎていく……。

即位の式典を終えてほどなく、思わぬ客がホンタイジのもとを訪ねた。他ならぬ袁崇煥の使者だった。

「ここに通すがよい」

ホンタイジは内心の不快感を殺しながら命じた。やがて袁崇煥の使者数名が、貢物を持参してホンタイジの前へ姿を現す。貢物は多額の銀、そして鮮やかな絹織物などである。国力を示してこれから始まる交渉を有利に進めようとする計画であった。

「今日は我等、我等の主の祝いの言葉を伝えるため参上した次第」

使者は軽く頭を下げ、少々皮肉めいた口調でいった。

「用向きを申してみよ」

ホンタイジはややうるさそうな様子でいった。

「されば、今貴国は危急の時にあります。先君が亡くなられ日が浅く、我が国のみならず東の朝鮮、西の察哈尔（モンゴル人の国）も虎視眈々と機を窺ってござれば、三方敵に回すは得策とは申せませぬ。ここは一旦我らと和平の道を探り、朝貢の実を取るが得策と存じるがいかかか？」

「我等に和解に応じよと申すか」

ホンタイジの眉が陰しく動いた。

「我が国土は広大、物資は無尽蔵、我が国がその気になれば百万の大軍をようつるも不可能ではござらぬ。もし我等が察哈尔、朝鮮と手を結べばいかなることになるか」

使者はあくまで強気である。

「かつて宋の御世、貴殿等女真の国は、北のモンゴルそして宋によつて南北より攻められ滅亡のやむなきに至りました。同じ過ちは二度繰り返すべきではないと存するが」

使者は表向きは穏やかに口上を伝えたが、その一方、新たな大汗として即位したホンタイジの器量を窺おうとする様子が、ありありと見てとれた。

「さてさてそれはいかなものかな、確かに貴国は大国、我等は小邦にすぎぬやもしれぬ。なれどかつて漢の高祖は匈奴を討伐せんとして果たせず、唐の太宗は突厥の前に一度は膝を屈した。宋は遼、そして我等が女真の国によって国土の大半を奪われた。貴国は所詮文弱の国、我等なら一人でこなた等の国の兵卒十人は相手にできるものと存するがいかがかな」

使者は少々驚きの色を浮かべた。蛮族の王とばかり思っていたホンタイジが、歴史に対して一通りの知識をもっていたからである。

「こなたは先刻、今我が国が存亡の危機にあると申したが、それはこなた等の国にもあてはまるものではあるまいか。宮廷では宦官が政治の実権を握り、皇帝は耳目をふさがれたも同然。民は飢え渴き、土地を捨てて逃亡する者後を絶たぬと申すではないか」

使者の額に脂汗が浮かんだ。足元を見透かされた焦りから来るものであった。しばし両者の間に沈黙があった。やがて、

「よかるう、和平のことホンタイジしかと応じたと、こなた等の主に伝えるがよい」

と、ホンタイジはやや重い声でいった。使者にかすかに安堵の色が浮かんだ。

「ただしこれだけは申しておく。かつて我が女真の国は宋と手を結び、遼を陥れんと欲した。あのおり宋は我等との約定を反故にし、真偽に反するふるまいに及ぼうとした。故に我が女真の国は宋の皇帝を虜とするのやむなきに至った。もし汝等に真偽に反するふるま

いあれば、我等ただちに北京を陥れ、再び皇帝を虜とするであらう。
その儀、こなた等の主にしかと伝えるがよい」

「しかと……伝えまする」

しばしの沈黙の後、使者もまた重い声でいった。使者はその日のうちに足早に瀋陽を後にした。

ドルゴンは兄阿濟格等とともに、全ての身分を剥奪された母烏拉納喇氏の密葬をすますと、思わず天を仰ぎみた。

『いつまでも、悲しんでばかりいてはいけませぬドルゴン』

どこからともなく母の声がしたようで、ドルゴンは我に帰った。

「天の彼方へ……」

ドルゴンはぼそりと一人ごとをつぶやいた。

「兄上、これから一体どうなってしまうのですか」

たずねたのは多鐸だった。

「有為転変こそ世のならい。人はいつ母上のように不慮の事態に巻き込まれるやもしれぬ。なれど世にあるうちは最善を尽すより他あるまい。あの天の彼方へ赴く時まで」

かたわらで様子を見守っていた阿濟格は、かすかに驚きの色をつかべた。もともとドルゴンは早熟だとおもっていたが、悲しみを乗り越え、さらに心が一回り成長したように思えたからである。

ドルゴンは眼光はまっすぐに遠くをみつめていた。やがては曇りなき天へ……。この日、遼東の空は奇妙なほど澄みわたっていた。

栄華と落日の時

中国四千年史は王朝交替の歴史である。政権運営能力を失った王朝は、新たに有徳で力ある者にとつて代られるというのが、有名な易姓革命の論理である。むろん易姓革命なるものが実行されるためには、多くの流血が伴うことになる。中国の各王朝の正史を一読すると、まず目を覆いたくなるのが極度の人口大激減の記録である。例えば前漢の初期の人口調査では約六千万いた人口が、前漢末の混乱を経て後漢が成立する頃には、二千万まで減っている。これと同じことは他の王朝交替期にも大なり小なりおきている。

人口大激減の原因は、一つには王朝の力が衰えてくるとともに、辺境での北方遊牧民等との抗争が激しくなり、結果多くの成人男子が兵士として出征を余儀なくされ、農村が人手不足に悩まされたことである。主要な働き手を失った農地は荒れ放題となり、各地で飢饉が発生する。そして食料がとぼしくなると、イナゴ等の昆虫は天を覆うほどの群れで作物を荒らすので、もともと乏しい食料はさらに乏しくなるのである。さらにここに水害や日照りが重なると、一度に数十万から数百万の人間が消えることも決して珍しくないのである。

明朝末期という時代もまた、民・百姓にとり生き地獄に等しい時代であった。俗にいう万暦の三大征、北方での女真との攻防、さらには万暦帝の度を越した奢侈等により、明の国庫は空になり、そこへ中国全土を深刻な飢饉が襲った。

こうした中、北京紫禁城を揺るがす事態が勃発した。天啓七年（一六二七）、明朝第十六代皇帝天啓帝崩御、わずか二十三歳だった代わって泰昌帝の第五子すなわち天啓帝の弟にあたる由検が崇禎帝として即位した。まだ十七歳である。

新帝が治世になったとはいえ、政治の実権は依然として宦官であ

りながら東廠のトップでもある魏忠賢と、天啓帝の乳母で魏忠賢の政治上のパートナーとでもいうべき客氏ににぎられており、若い皇帝の出る幕はない。崇禎帝は明の他の多くの皇帝がそうであったように、生来資質そのものに問題があったわけではない。あれいは平時であれば名君であることも可能だったかもしれない。しかし生まれた時代が悪かった。

時あたかも明朝を創業した太祖・朱元璋の生誕から、ちょうど三百年の歳月が流れようとしていた。極貧の乞食坊主から身を興したといわれる偉大な創業者朱元璋は、同じ庶民出ということ、しばしば漢・高祖と比較されることがある。自らが一個の無能体でありながら臣下を縦横に使いこなした漢・高祖などとは異なり、朱元璋は自らが優秀な将であり、知識人であり、また偉大な政治家であった。暗君続きの明朝がまがりなりにも三百年の命脈を保ったのは、ひとえに創業者に明太祖のような傑物をえたからであつたといわなければならぬ。

かつて宦官鄭和をして、コロンブスの新大陸発見にさえ先んじてアフリカ東海岸にまで艦隊で到達した大国明。衰えたりとはいえ後二十年ほどで、紫禁城そのものが天下争覇の舞台になるうとは、恐らく年若い皇帝も、宮廷の百官達も、いや天下の民も予想だにしていなかっただろう。

さて天下の民草の苦しみをよそに、紫禁城は表向きはのどかな日々が続いていた。紫禁城の西に北海・中海・南海の三つの池水が連なつて、俗にいう「三海」を構成している。三海 of 歴史は古く、金代にはすでに宮廷人の行楽の地だったといわれる。新帝が即位してまだ間もないある夏の暑い日、北海に浮かぶ一隻の竜船があつた。今をときめく客氏と、客氏に仕える宮女と大勢の宦官を乗せた船だつた。かつて元の頃、最後の皇帝となつた順帝が、巨大な竜頭をかざした船を北海に浮かべたという伝承を客氏が耳にし、夏の暑さを

すこしでも和らげる余興として、自らも竜頭をかざした船を建造させたのだった。むろん長さ一六〇メートルもあったという順帝の船には、到底及ばない規模ではあった。

四十半ばの客氏は全身真っ赤な衣装を着て、宮女達に巨大な扇子であおがせ、濃い化粧のせいで年齢より多少は若くみえる。

「暑いのが、こう日夜暑いと肌も荒れてかなわぬ」

客氏はため息まじりにいった。

「わらわは夏は苦手じゃ、この北京は涼しい季節がやはり最もよい」確かに、かつて元の時代には蒙古族は夏の暑い盛りだけは、長城の外の開平府に小型の都城を建設しそこに移り住んだといわれる。

北京の夏は決して過ごしやすくないのかもしれない。客氏がうんざりしていると、宦官のうちの一人が卓の上に巨大な西瓜を用意し、「恐れながら、德州（山東省）の西瓜にござります」

とうやうやしくいった。そのとき客氏は、

「待て、その西瓜はもしや腐っているのではないか」

と疑念をもった。包丁を入れると果たして西瓜は腐っていた。

「無礼者！」

客氏は宦官めがけて腐った西瓜をぶつけた。腐敗した汁を顔中に浴びた宦官が、平謝りして客氏の元を去ったその時異変はおきた。突如として船が激しく揺れた。池の中に潜んでいる何者かが船底に穴を開けたのである。この事故で客氏はかろうじて一命をとりとめたが、多くの宮女と宦官が溺れ死ぬこととなった。さらに客氏自身も数日熱にうかされるはめとなったのである。

やがて魏忠賢を頭とする東廠による調査が開始され、下手人のめどはあらかたついた。あまりの権勢ゆえ数多くの敵をもつ客氏と魏忠賢は、この際怪しい者は徹底的に根絶やしにしようとはかった。客氏の身の世話をする宦官のうち一部の者が突如呼び出されたのは、ようやく客氏が健康を取り戻し始めた時分のことだった。

「皆に集まってもらったのは他でもない。実はこの中に先日わらわ

の命を奪わんとした不届き者の一味がおる」

客氏の言葉に場内は一瞬緊張がはしり、それぞれが近辺の者の顔を疑り深く見回した。

「すでに怪しき者の名はあがっておる。その者の食事には毒を入れておいた。一口食するだけで悶絶することであろう。己の心に一点の曇りもない者だけがはように箸をとるがよい」

客氏にうながされて、宦官の多くが用意されていた食事に手をだした。ところが三人だけ箸をとるのをためらう者がいた。

「どうした何故箸をとらん」

かすかに客氏の言葉の奥に底意地の悪い響きがあつた。宦官のひげのない表情に次第に脂汗がつかびはじめた。

「案ずるには及ばん。そもそも毒など最初から入っておらぬからかう」

その少し年老いた宦官ははかられたと思つた。命はもはやなきものと思つたのか、突如として懷に隠しもつていた匕首をとりだし、

「国賊覚悟！」

と叫んで、客氏の命を奪わんとした。だが匕首は客氏にとどかなかつた。不意に東廠が部屋に乱入し、三人をとりおさえたからだつた。

凄惨な拷問が始まつた。数日の後三人のうち一人が自らが崇禎帝のもとからつかわされた密偵であることを自白した。だが肝心な竜船沈没の一件に関しては関与を否定し続けた。

他の者は口を割らなかつたが三人の末路は哀れだつた。命を奪われた上、肉を細かく切り刻まれ、皇帝の食卓に希代まれにみる珍味として陳列されたのである。むろん皇帝は魏忠賢のある種の恫喝行為に言葉を失つた。その場にいた宮廷の百官の中にも、あまりのことであつたため嘔吐してしまう者までいた。

若年の皇帝にも自らの手で傾いた王朝を立て直したいという気概だけはある。そのためにはなんとしても 魏忠賢一派を取り除かな

ければならない。皇帝は悲壮な思いを固めなければならなかった。

父を魏忠賢の弾圧で殺された清初の学者黄宗義はいう。

「宦官の災いは漢唐宋を経てやむ時がないが、明に至ってはその激しさを極めている。漢唐宋では朝廷の政治に關与する宦官はいたが、宦官に奉仕する政治は存在しなかった。然るに明においては、大学士（宰相格）も中央官庁も、宦官奉仕のための機関になりさがってしまい、天下の財も、天下の兵も、すべてが宦官のための存在と化してしまつた」

史上空前の宦官王朝とでもいうべきであろうか、自らを聖人孔子に匹敵すると豪語した魏忠賢こそ、ある意味明王朝の象徴的存在であつたかもしれない。だがその魏忠賢にも落日の時が迫つていた。

ある夜、食事を口にした皇帝は突如苦しげなうめき声をあげ、ただちに寢室に担ぎこまれた。ほどなく医師がよばれ、他の者は部屋から退去することとなつた。

「陛下、苦しゅうござるか？」

医師が一声かけると、崇禎帝は何事もなかつたかのように寢床から起きあがつた。

「案ずるな偽りの病よ、余は先々帝とはわけが違つぞ」

医師が驚くのを尻目に崇禎帝は、

「給仕を司る宦官に魏忠賢の息のかかつた者数多おつたであろう」

と一言いい、かすかに笑みさえもらした。医師が瞬時、年若の皇帝に並々ならぬ覚悟のほどを読みとつたのは、まさにこの時であつた。

時を経ることなく魏忠賢一派の給仕を司る宦官達が捕らえられ、牢に入れられた。この動きに魏忠賢と長年対立關係にあつた東林党といわれる士大夫の集團が同調した。彼等の助勢も得て皇帝は、魏忠賢を皇帝に毒を盛つた疑いの他に、十の罪をもつて弾劾したのだつた。十の罪とは、

- 一・皇帝と並んだこと
- 二・皇后を酷く扱ったこと
- 三・先帝をきちんと祭らなかつたこと
- 四・皇族の土地を勝手に削ったこと
- 五・聖人と名乗ったこと
- 六・爵位を乱発したこと
- 七・民を苦しめたこと
- 八・満州方面での軍功をおさえたこと
- 九・臣下と皇帝の間に立ったこと
- 十・兵事を弄んだこと

といった内容である。半ばいいがかりに近いものも多いが、天啓帝という後ろ盾を失った魏忠賢には、もはや逆らうことはできなかった。魏忠賢はついに牢に入れられたのである。

数日すると皇帝の使者を名乗る者がやってきた。

「魏忠賢よ、こなたの疑念は半ばとけた。あとはこなたがこの書類に、決して朝廷に対し二心なきことを誓う署名さえすれば、汝はこの牢からでられるであろう。あとは皇帝次第だ」

魏忠賢は書類に目を通してしてみたものの、文盲なのでなにが書いてあるのかまったくわからない。ただ藁にもすがるような思いで、ようやく覚えた自分の名前を書類に書き込んだ。ところが使者のいうことは偽りだった。そこに記されていることは身の潔白どころが、自らの容疑を認めいかなる刑をも甘受するという内容だったのである。哀れな魏忠賢は鳳陽という場所に流罪となったのである。

時を同じくして客氏もまた捕らえられた。客氏は鞭打ちの後、木馬の刑となった。

下半身を裸にされたうえで木馬に乘せられ、両腕を後ろで縛られ、縄で天井より吊るされる。すべての体重が股間に掛かることになり、

凄まじい苦痛となつた。特に陰部に加えられる苦痛と羞恥は想像を絶していた。客氏はついには下腹部から血を滴らせ、悶絶して果てたのである。

「水……水をくれ……」

蠟燭の灯火だけがかすかに暗い部屋を照らしていた。魏忠賢は言語に想像だにできない苦痛で、数日意識朦朧とした中をさまよっていたのである。

眼前に初老の男が水瓶を持って立っていた。

「今一度申しておくが、くれぐれもわしを恨むなよ。こなたが好んで去勢の道を選んだのじゃからのう。こなたの傷口には白蠟の棒が入つておる。水を飲めば尿の道を閉ざす。棒を抜けば肉が盛り上がつて小便の道を閉ざす。いずれにせよお前さんはあの世いきじゃ」
「構わぬ……もはや生きたいとおももわぬ……」

老人はなおも冷たい目で魏忠賢を見おろしていたが、やがてあきらめたかのように、水を口にふくませた。しばし後、忠賢は安堵したかのような表情をうかべる。

「哀れな奴よ、せめて今際の際くらいは富貴を得る夢にでも出会えるといいが……」

老人は静かに目を閉じた……。

「まだ生きておつたのか……」

忠賢は流罪となつた鳳陽にある粗末な家屋で、悪夢から覚めた。去勢して以来幾度同じ悪夢に苦しめられたことであらう。いまだ己が肉体が世にあることに忠賢は、ある種のおかしみがこみあげてきて、ついには声をだして笑った。だが共に流罪となつた他の宦官が客氏の死を伝えると、しばし沈黙しさしもの魏忠賢も瞑目せずにはいられなかった。

「あれいはわしは富貴を得る夢を見ていたのやもしれぬ。だがもう終わりか」

時にまだ元号改まらず天啓七年（一六二七）十月、栄華を極めた魏忠賢はついに首を吊って果て、一族もことごとく滅ぼされた。魏忠賢は六十歳であった。

ここに理想に燃える崇禎帝による新政が開始された。だが新帝はまだ知らずにいる。己が中国史上で最も不幸な星の巡り合わせに生まれた皇帝であるということ。

代善の悲劇

さて新たに大汗となったホンタイジの最初の大仕事は、朝鮮攻略となった。李氏朝鮮の仁祖・李？は、金側からホンタイジの即位を通過したにも関わらず、一人として挨拶の使者を送ってよこさなかった。自ら小中華を名のる李氏朝鮮にしてみれば、女真族などというものは、所詮蛮人の集まりにすぎず、宗主国として朝貢を要求するなど片腹痛い話しでしかなかったのである。むろんホンタイジにしてみると、朝鮮の無礼を放置することは国の対面にかかわる。

実際に朝鮮王朝攻略の主力部隊を構成したのは、？藍旗の阿敏と弟の済尔哈朗シルガラの部隊。代善と二人の子供等からなる？紅旗の部隊であった。そしてドルゴンは、兄、阿济格の正黄旗の部隊の一翼を担うこととなった。むろんドルゴンにとり、初めての本格的な戦闘であった。

女真の部隊は怒涛の勢いでたちまち鴨緑江に達する。ここを越えれば朝鮮国である。だが想定外の異常な寒波のため、行軍はここで一旦滞ることとなる。

「今日はここで野営する。だがここはもはや敵地も同然、くれぐれも油断だけはするな」

全軍を統べる代善が威厳のこもった声でいうと、それぞれの部隊ごとに野営の準備にとりかかるため一旦解散となる。

「待てドルゴン、そなにはおりいって話したいことがある」

最後に残り一礼して代善のもとを去ろうとしたドルゴンは、不意に呼び止められ何事であろうといぶかしんだ。代善とドルゴンでは兄弟とはいえ年に相当なひらきがあるせいもあって、今まで親しく交流などしたことはなかった。ドルゴンがかすかに驚きの色を浮かべたのも、いわば当然のことであった。

「こなた今は亡き父上の遺言により、こなたの母を失うはめになつたそうじゃな」

ドルゴンは瞬時とまどつた。というより心の奥深くうずめようとしている、自らの母の無念の死という痛恨事が再び脳裏をよぎり、一時不快の念を隠しとおすことができなかった。

「さぞかし父上を恨んでいるであらうのう」

「いえ、決してかようなことはござりませぬ」

ドルゴンにしてみれば他に返答がつかばない。

「隠さずともよい。わしもかつて一度だけ父を深く恨んだことがある」

一体なんのことなのかドルゴンには、むろん想像もつかない。代善がドルゴンに語つて聞かせたのは、奴児哈赤の第一子にして、代善にとつて母を同じくする兄？^{チュエン}英の物語だつた……。

？英は勇猛だつた。武勇だけなら弟達の何人たりとも及ばなかつたかもしれない。だが強すぎる一方、寛容さがなかつた。時に他の兄弟達につらくあたることもあり、またかつて奴児哈赤のウラ部討伐に同行した際は、降伏した敵を騙し討ち同然に皆殺しにしてしまつた。奴児哈赤の許しをえないこの虐殺に、奴児哈赤は語気を強くして？英を叱責した。？英は初めて心から父を憎悪した。そして奴児哈赤の留守をみはからい、天と地の精霊を祭つて父を呪詛するといふ暴挙にでたのである。

事は明るみにでて、ついに？英は幽閉されるに至つた。そして代善が奴児哈赤から与えられた任務それこそは、？英に死を賜ふことだつたのである。

やはり凍てつくような冬の闇夜のことだつた。代善は父である奴児哈赤より、？英に死を賜ふという重大な任務を負い、？英の幽閉されている粗末な小屋を目指していた。すでに？英は病の身となつており、代善の訪問をオンドルの上に身を横たえて出迎えなければ

ならなかった。かつての勇者の面影はすでにない。だが不意の弟の来訪に？英はかろうじて立ちあがった。そしてまた苦しそうに咳をするのだった。

「覚えておるか代善、我らがまだ幼かった頃、はるか高い山の頂上まで登れば、あの星を手にとることができる。そう信じて雪の中を山頂を目指した時のことを」

「兄さんももちろん覚えてるよ。二人で遭難して途方にくれて、遠くから響いてくる狼の遠吠えが、どれほど恐ろしかったことか。洞窟で一夜明かして、もし嵐がやまなければ二人とも死んでいた」

「だが俺はまだ星を欲している」

そこまでいうと、？英は苦しそうに顔を歪めた。

「兄さん、あまりしゃべらないほうが……」

「父が申した寛容さとはなんであるのか、この二年の間ずっと文殊菩薩に問いかけてきた」

？英の視線の先に、代善の背丈ほどもある文殊菩薩像があった。

代善がしばし菩薩像のなんともいぬ気高さに、奇妙な安堵感をえていると、不意に驚くべき事態に直面した。菩薩を見つめる？英の目に涙を見たのである。戦場ではまさしく鬼だった兄？英、己が懦弱に陥った時、厳しすぎるほどであった兄？英。物心ついた時から兄は涙などとは最も無縁な存在としか思っていなかった。その兄が落涙した。代善は兄の心に悟りすました何事かの心境の変化を見た。

「文殊菩薩はいかな罪を犯した者も慈悲の心で包むという。だが俺は誠に文殊菩薩の慈悲にあやかることが許される人間であるのか否か、来る日も来る日も考えた。己にできることといえば武芸のみ。故に俺は文殊菩薩の前で剣舞を舞った。来る日も来る日もだ。そしてある夜のこと奇跡はおきた。突然、文殊菩薩がまばゆい光をはなつたのだ。俺は剣を捨てて一歩、二歩、文殊菩薩のほうに歩みよった。菩薩の手が優しく俺をつつみこみ、ゆっくりと俺の汗をぬぐったのだ。しばし俺の心を一筋の光明がよぎったのは、まさにその時

だったのだ」

代善はしばし呆然として？英の言葉に聞きいつていたが、すぐに我に帰った。この兄に死を賜る。恐らく生涯忘れることはないだろう。しばし代善は兄を顔をまっすぐに見つめた。

「俺は先刻からお前の常ならぬ様子に気付いていた。お前は今日、父の命により俺の命を奪いにやってきたのであるう」

胸中をいいあてられ、代善はかすかに顔色を変えた。

「父に伝えてくれ、決して父を恨んでおらぬと。わしは愚かであったが、今となつては父上のもとに生を受けたことを誇りに思つておると」

代善は思わず強く拳を握りしめた。今この状況で、もし立場で逆であつたら、むしろいかほど楽であろうかとしばし瞑目せずにはいられなかった。

「そしてついに兄君様の命を奪われたのですか」

ドルゴンは代善の様子をうかがいながら、注意深くたずねた。

「いやわしにはついにできなかった。あれいかなわぬことと思いつながらも、兄が止めるのも聞かず、今一度父のもとに命乞いに戻つたのだ。だが父は一部始終を聞くと血相をかえたのだ……」

「馬鹿者が！ 何故すでに覚悟し悟りすました者に死を賜らなかった。せめて弟である汝の手で死を賜るが慈悲であるという、わしの心がわからぬか！」

「恐れながら、父の申すことは人の申すこととも思えませぬ。我らは漢人達の申す狼や虎のごとき者ではござりませぬ。もしどうしても申すなら、兄のかわりに己が自害いたしまする」

奴児哈赤はしばし沈黙した。椅子に腰かけた奴児哈赤は、そのしばしの間に拳を震わせ、唇を強く噛みすぎてかすかに血が滴っていた。次の奴児哈赤の言葉は代善にとってあまりに衝撃的であった。

「愚か者が、そなたがもしここで自害したところで、？英がすでに世にないことに気付かぬのか」

代善はしばし茫然自失となった。

「あやつは誇り高き者、今さら命乞いなど欲しておらぬし、こなたがやらねば自ら命を断つ。あやつはそう言う者ぞ」

代善はかすかであるが己が犯した過ちに気づいた。だが最早手遅れかもしれないと思った。

「こなたは今、われ等は獣ではないと申したな。獣とて我らと同じこと。生まれし時より山河とともにあり、山河、すなわち世の天地精霊に育まれねば生をまつとうすることかなわぬ。わしが常々思うは我が命尽きる時、天地精霊に決して恥ずべきことなきようということじゃ。わしとてかなうことならば？英を殺したくない。だが天地精霊に誓い後ろめたきことあらば、私情をはさむことできぬ」

奴児哈赤はきっぱりといいきった。

「こなたは？英を二度殺した。一度目は心を二度目は？英の肉体そのものをだ」

そのまでというと奴児哈赤は再び拳をふるわした、無念の形相をうかべた。

「わしは再び兄のもとへ戻った。果たして父上のおっしゃたとおりだった。すでに兄は自害していたのだ。わしは冷たくなった兄を抱いて、一晩中泣き続けた。悲しみが流れて決して止むことのない滝壺のようにこみあげてきた」

ドルゴンは沈黙したまま代善の話しに聞きいつていた。

「わかるかドルゴン、父の心には常に我らが住まう山河があり、目に見えぬ天の意志を恐れてもいた。そして常々おおせられていたことは、人はただ世にあることだけが、生きるということではないということじゃ。肉体が朽ちてなお人の心の中にある。それこそが真にいきることだと仰せられてのう。

父上と汝の母の間になにがあったのか、詳しいことはむろんわし

にもわからん。なれど父の真の意思は汝を生かすため母を殺した。そして死してなおこなたの母を、己が瞳に焼きつけるため……」

一寸先の視界をも遮っていた雪と風雨がにわかにはずまった。満月が眼前の鴨緑江の凍結した水面を鮮明に照射する。

「いずれにせよドルゴンよ、そなたは一刻も早く勇者にならねばならぬ。父上のためにもな。何故かわしにはそなたが、亡き我が兄に似ているような気がしてならんのじゃ」

そこまでいうと代善は馬にまたがり鞭をいれる。ドルゴンは代善が去った後もしばしその場に立ちつくした。ドルゴンは亡き父をそして代善という人物を初めて知ったのであった。

翌未明風雨は止んだ。女真の部隊は凍結しきった鴨緑江を渡り、李氏朝鮮の領土へと足をふみいれた。ドルゴンにとって故郷を後にして初めて見る異国である。天の色、山河がおりなす空気までもがかすかに違うものにおもえてくる。だが感傷に浸っている余裕などない。ドルゴンは一刻もはやく、代善のいう勇者とならなければならなかった。

丁卯胡乱・朝鮮征伐（一）～ドルゴンの初戦

天聰元年（一六二七）一月、女真騎兵は雪崩のように朝鮮領内に侵攻を開始した。そして十七日には朝鮮北部・平安道龍川に達し、朝鮮の将帥毛文龍と干戈を交えることとなる。朝鮮側のいう丁卯胡乱の始まりである。

ドルゴンは思わず息を飲む。初めて知る戦場、眼下には李氏朝鮮の大軍が隊列を整え、戦闘開始の時を今や遅しと待ちかまえている。敵兵の放つ殺気が、平素より冷たい風とともに伝わってくるかのようである。ゆっくりゆっくりと白い息をはきながら、最前列の兵が弓を構えて迫ってくる。

戦闘は朝鮮側の弓隊の一斉射撃から始まった。たちまちのうちに銀化粧した大地が血の色にそまる。弓隊が退くと続いて鳥銃部隊が女真側にしっかりと狙いをさだめる。

李氏朝鮮王朝は、かつて秀吉の朝鮮出兵のおり、日本側の火縄銃に歯が立たなかった経験から兵器の改革を進め、この戦いにおいても多くの鳥銃を所持していた。

女真側は弓で応酬するも、さすがに鳥銃相手では分が悪い。緒戦の劣勢をドルゴンは齒ぎしりしながら見守っていた。

「早まるなドルゴン、戦いはまだ始まったばかりだ」

正黄旗を束ねる兄阿濟格が、はやるドルゴンの胸中を察して声をかけた。

朝鮮の部隊は鳥銃部隊と弓隊が入れかわりたちかわり女真側に痛撃を浴びせた。やがて抗しかねたように女真の部隊は逃走を始める。ところがこれが畏だった。追撃を開始した朝鮮軍を待っていたものは、雪原にぽっかりと開いた落とし穴だった。たちまち前衛部隊が混乱に陥り、動揺が全軍に伝播していく。

「今ぞかかれい！」

全軍を束ねる代善の号令一下、女真の誇る八旗の部隊が一斉に反撃に転じる。阿濟格率いる正黄旗の部隊もまた、敵中只中に突撃していく。むろんドルゴンも戦闘に加わった。こうなってしまうと天下に精強をもつて知られた女真の八旗に対し、もともと怯懦な者が多く戦闘意欲に乏しい朝鮮の部隊である。朝鮮側は分が悪い。鳥銃を保有している優位を生かすこともできず、全軍が崩壊していくのに時がかからなかった。

ドルゴンはこの戦いにおいて、初めての戦いとは思えぬほど勇敢だった。その存在を誇示することに成功したのである。だが試練はすぐにやってくる。

女真騎兵の無人の野を行くがとき南下が始まった。郭山・安州・平壤など各地で朝鮮軍を撃破、二月末には朝鮮の首都漢城にまで迫る。危機が迫り朝鮮の仁祖・李？は、三百年後に明治日本と李氏朝鮮との確執の部隊ともなる江華島へ避難。ここで女真側は思わぬ足止めを食う。女真騎兵は陸上での戦いには強大であったが、なんと水軍を持たなかったのである。朝鮮の水軍は陸地に構えられた女真側の陣容めがけて、玄字砲・地字砲などの大砲を放ってくる。さしも女真の精鋭部隊もついには指揮系統まで寸断され、非常に危険な状態へと陥った。やがて雪の降りしきる中地上戦となった。

「ええい何をしておる。これしきの戦いで負けるわけにはいかぬ」

血気にはやるドルゴンは、阿濟格が止めるのも聞かず敵の只中に騎馬を進める。だが鉛玉と矢の嵐の中、さしものドルゴンも今まで感じる事がなかった、戦場の恐怖というものを初めて味わうこととなった。そしてついに銃弾が右肩を貫通し、ドルゴンは鈍い音とともに馬から転げ落ちる。かろうじて立ちあがったものの、激痛のあまり思わず片膝を突いた。辮髪が激しく乱れた。不意にドルゴンの脳裏をよぎったものは、奴児哈赤と烏拉納喇氏の姿だった。

「死ねない、俺はこんなところで死ねない。なんとしても俺は勇者にならなければ……」

苦しい息のもと立ち上がろうとしたが、次第に意識が遠のいていく……。次に目を覚ました時、ドルゴンは寝台の上にいた。目の前に阿済格が立っていた。

「俺はまだ生きているのか」

ドルゴンは、しばしの間、安堵と驚きの入り混じった複雑な表情を浮かべた。

「やっと目を覚ましたのか、三日間寝たきりだったぞ」

阿済格もまた、かすかに安堵の表情を浮かべたが、次の瞬間には厳しい顔つきにかわった。

「いいかドルゴン、戦闘というものは、ただ勇だけあればいいというものではない。時に冷静に状況を把握して慎重になることも大事なことなんだ。お前に死なれては亡き母者に申し開きの言葉もないからな」

己の不覚に言葉もないドルゴンは、ただうつむき、そしてまだこみあげてくる痛みを生涯忘れまいと誓うのだった。

やがてドルゴンは、まだ完治しない右肩の痛みに耐えながら、軍議に参加することとなった。席上ドルゴンは一言も言葉を発しなかった。こころなしかその場に集った者等の多くが、戦場で不覚をとった己をあざ笑っているかのように思えて、言葉もでにくかったのである。ドルゴンは名誉を回復する機会を欲した。勇だけでない智将としての己に目を開くのは、ほどなくのことであった。

丁卯胡乱・朝鮮征伐（二）～若き飛龍

李氏朝鮮と女眞の確執は、朝鮮の始祖・李成桂が豆満江下流地域の女眞を平定した時代までさかのぼる。さらに四代目の世宗十六年（一四三四）からほぼ十年の間に、たびたび侵入を繰り返していた女眞を征討し、ここに慶源・鐘城・会寧・慶興・穩城・富寧の六つの鎮が置かれることとなった。

これら六つの鎮では必要に応じて堡壘など防御施設が設置され、軍隊が駐屯した他、南方から罪人などが強制移住させられ開拓が行われた。特に南方のすすんだ稲作技術が伝わったことにより、会寧・慶源・鐘城・穩城の朝鮮・女眞の国境沿いに広大な官屯田が出現することになる。

こうした朝鮮北方における稲作技術の進歩は、十六世紀に入つて極盛期をむかえる。十六世紀は、中国長江デルタ地帯の水利条件が格段に整備された時代でもあり、また日本でも大河川流域の開発が本格化する時期でもある。いわば東アジア全域で乾燥地の畑作から湿潤地での稲作へのシフトが大規模に行われた時代なのである。

だが一方で女眞は相変わらず人口が極小で、狩猟・採取に頼る細々とした生活が進歩することなく続いていた。歴史上未開は常に文明を欲する。いわば女眞と朝鮮そして明国との対立は必然であったといえるかもしれない。

朝鮮と女眞の江華島をめぐる攻防は長期化していた。朝鮮側には各種大砲の他に飛撃震天雷といわれる兵器もあった。震天雷は目標物めがけて発射される、いわば時限爆弾である。形状はひょうたんのようになく銃口は角ばっており、銃口には取つてのついた蓋があった。丸い本体にねじ型の木谷と導火線の入った竹筒を入れてから、筒の中間部にある穴に火薬を入れて使用したといわれる。爆発の際の衝撃音だけでも、女眞側を動揺させるのに十分で、乱戦の最中、

阿濟格は負傷し、以後正黄旗はドルゴンが事実上の將の役割を担うこととなった。むろんドルゴンにとり初めての戦闘で、将といっても半ば飾り物に近いものであった。

実際に兵器を使用しての戦闘もさることながら、両国の間諜による諜報戦もまた活発で、女真側の間諜が敵方に侵入し帰還しないこともあれば、朝鮮側の間諜が女真の陣地で捕えられることもあった。そんなある日、一人の朝鮮側の間諜が、正黄旗の陣地で捕縛された。「どうかお命ばかりはお助けくださりませ」

縄で縛られた朝鮮側の間諜は、女真の言葉でドルゴンに命乞いを始めた。手足をぶるぶると振るわせいかにも臆病な様子がみてとれた。

「こなたは何故われ等の言葉を話すことができるのだ」

ドルゴンがいぶかしみ尋ねると、朝鮮側の間諜は、

「実は何年前か前、貴国との国境付近で、貴国の人狩りに身柄を拉致され、数年間奴隷として農作業などをしていた。隙を見て逃亡し、女真の言葉を知ったことから、今回間諜の役目を与えられたのだ」

と以外なことを半ば震えた声でいった。女真の人間が朝鮮などから人を拉致して、半ば奴隷として扱ったことはまぎれもない事実である。人間を拉致して酷使するということは、むろん非人道的行為以外の何者でもないが、女真にしてみれば人口不足を補うための窮余の国策だったのである。

ドルゴンはしばし沈黙した。幼少の頃から驚くほど知恵のまわるドルゴンは、目の前の敵国の間諜を利用するでだてを考えた。間もなく間諜は縄をほどかれ、粗末な食事をあてがわれ、しばし監禁されることとなった。

夜が訪れた。ようやく眠りにつこうとしていた矢先、間諜は突如として叩き起こされ、黄色に龍が描かれた正黄旗の旗が風にかすかになびく中、ドルゴンの待つ本営に通された。

「朝鮮国の謀者よ、実はそなたに頼みたいことがある。もし引き受けるなら、そなたの命まではとらん。なれど断ると申すならもはやせん無きこと」

ドルゴンはかすかに剣に手を触れた。

「そなたの任務は、これから私が申すとおり、朝鮮国の言葉で手紙を書き、江華島にあるこなたの国の陣営にとどけることだ」

ドルゴンを取り囲む正黄旗の武者達からもかすかに殺気が伝わってきて、武者はしばしためらった後筆を取った。ドルゴンの口上とは、

『敵方の正黄旗の部隊においては、大将自らが負傷し、戦意に乏しいため、明日深更夜陰にまぎれて平山方面に帰国する手はずとなっております。どうかこの機をのがさず、一隊をさしむければ、これを全滅させるはいとたやすいこと。敵の戦意を挫く絶好の好機と存じます』

間者は何故自分がこのような内容の口上を記さねばならぬのか、しかとしたことはわからなかった。己にわざわざ自軍の機密を知らしめるため、自らの陣に戻れというのか、それとも何かもっと深い何事かの理由があるのか。とにかく使者は命がほしいために、いわれるがまま朝鮮の言葉で手紙を書き終えた。

「うむご苦勞であつた。ところで一つものを尋ねよう。そなたにとってそなたの祖国とはいかなるものであるか」

ドルゴンは一通り手紙に目を通した後、間者に尋ねた。むろんドルゴンに朝鮮の文字は読めない。

「愛しいものでございます」

間者はありきたりの言葉を口にした。

「命を捨てても愛しいか」

間者はしばし沈黙した後、

「むろんにござります」

とやや重い声でいった。ドルゴンの目がかすかに鋭くなった。

「こなたは今、我らに対して利敵行為に及んだ。人として恥べき行為とはおもわなんだか」

しばし間者の額に脂汗がうかんだ。本能的の己の死を予感したのである。ドルゴンもまだ若いだけに正義感も多分にあり、敵国のいわば裏切り者に対し容赦がなかった。

「かように真偽に反する者の顔など見たくない。はように連れていき首をはねよ」

正黄旗の武者が二人両脇をかかえるようにして朝鮮の間者を連行し、間者は必死の命乞も空しく、悲鳴とともに白刃の餌食となってしまった。この時居並ぶ正黄旗の武将の多くが思った。

『この方には間違いない勇がある。ゆくゆくひとかどの人物になれるに相違ない』

やがて斬殺された武者の屍は海に流され、女真側と朝鮮側を隔てる水流を経て、江華島に流れついた。問題の書は、屍の鎧の中に隠された筒の中から発見され、朝鮮国王の目にも触れることになる。朝鮮側はこれを機会として軍議を開き、一隊を平山方面に先回りさせ、敵に一矢報いることとした。

その夜、朝鮮側の部隊は馬の口に牌を含ませ、厳寒の中、正黄旗の部隊とおぼしきかがり火が灯る地点を目指した。

「今ぞかかれい！」

殺気をおびた朝鮮の部隊が正黄旗の陣地めがけて殺到する。ところがそこに異変が待ちかまえていた。なんと陣地はもぬけの空で兵士一人さえ見当たらなかったのである。この思わぬ肩透かしに朝鮮側に動揺が走った。次の瞬間、周囲の山々から一斉に太鼓の音が響いた。謀られたとだれもが思った。

山が震撼するほどの太鼓の音とともに、正黄旗の部隊が一斉に朝鮮側を取り囲んだ。その中にむろんドルゴンの姿もあった。勇敢に戦うその姿は、さながら若き飛龍であった。奇襲のはずが逆に敵の奇襲をうけるはめになった朝鮮の部隊はもろくも崩れ、落ち武者が

我先にと逃げていく。

それはドルゴンにとり生涯初めての大勝であった。いわば敵の間謀を利用して一計を案じたのであった。智将としてのドルゴンの面目躍如たるものがあつた。

この後、女真側は朝鮮義兵に背後を突かれることを恐れ決戦に及ぶことができず、一方朝鮮側も仁祖・李？が長期化の様相をていした戦いに疲れ和を求めたことから、女真側を兄、朝鮮を弟とするこにより講和が成立した。だが朝鮮との争いは後に再燃することとなるのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3673m/>

明清・群星興亡賦～親王ドルゴンの理想

2011年8月4日03時27分発行